

みんなくりポジトリ

国立民族学博物館学術情報リポジトリ National Museum of Ethnology

D.ソドノム：

モンゴルにおける社会主義的発展の幕を引いた政治家

メタデータ	言語: jpn 出版者: 公開日: 2009-04-28 キーワード (Ja): キーワード (En): 作成者: メールアドレス: 所属:
URL	https://doi.org/10.15021/00001403

D.ソドノム

——モンゴルにおける社会主義的発展の幕を引いた政治家

解説

- | | |
|------------|------------------------|
| 1 故郷の始まり | 6 ツェデンバル氏の更迭 |
| 2 学校時代 | 7 ツェデンバル氏の誤ち |
| 3 イルクーツク留学 | 8 民主化の胎動 |
| 4 財務大臣時代 | 9 民主化運動への対応 |
| 5 対ロシア債務問題 | 10 「ツェデンバルの取り巻き」という批判 |
| | 11 「失われた10年」——社会主義の再評価 |

解説

D.ソドノム氏は2005年秋、日本・モンゴル両国間の友好親善に寄与したという功勞によって旭日大綬章を受勲した。民主化運動が激化する中で、閣僚会議議長すなわち今日の首相に相当する立場にあった彼は、1990年2月に来日を果たし、両国の今日的な交流を開いたのであり、現在もなお、モンゴル日本関係促進協会の会長を務めている。

後世から勝手気ままな批判をされたくないと思うモンゴルの政治家たちは、引退後にすばやく自伝を書くことが多く、彼もまたその例に漏れない。自伝『暮らし、思い』がすでに2003年に出版されていたけれども、日本の読者に、より生き生きと伝えたいからとお願いして、インタビューに応じていただいた。インタビューは2005年6月10日、ウランバートル市内中心部にあるホテルで3時間近く行った。

3時間とはいえ、Y.ツェデンバル氏との関係についてとくに集中的に事前に質問する旨を伝えていたことに応じていただいたため十分に充実したインタビューとなった。Y.ツェデンバルの失脚や死をめぐる噂話はこれまで大いに人びとのあいだで流布してきた。しかし、D.ソドノム氏の話は、そうした噂ではなく、当時の政治的環境からどのようにY.ツェデンバルの解任劇を説明することができるか、という具体的な状況を明らかにしている点できわめて興味深い。モンゴル・ロシア両国間にとって援助とその債務が最大の焦点であったことが浮かびあがる。

D.ソドノム氏はそもそも芸術をこよなく愛する人でありながら、その財務処理能力を見込まれて、もっぱら国際貿易に関する決済などを担当する政治家として出世していく。もし、民主化という新体制を迎えていなければ、あるいはY.ツェデンバルの後継者になっていたかもしれない。しかし、それゆえにまた、民主化後は一時、「Y.ツェデンバルの取り巻き」の1人として抑圧されていたのであった。この1件からわかるように、民主化したと言っても、おそらく社会主義時代にモンゴル社会が身につけてし

まった政治的慣習としての「追放」や「肅清」はそうたやすく無くなりはしなかったの
であろう。やがて名誉を回復して、現在では冒頭で紹介したような、社会主義時代には
想像もできなかった名誉を得るに至っている。

インタビューを終えてから、日本の読者にとくに伝えたいメッセージがありますかと
尋ねると、彼は「日本人はモンゴルの鉱産資源開発に奥手である」と述べた。つまり、
もっと積極的にこの方面で投資すべきであるという助言にほかならない。社会主義時代
はもちろんのこと、現在もなお、「外国資本によって鉱物資源を開発して国家経済を潤
す」という発想はおそらくこの国の政治家たちにとって習性なのであろう。

文 献

Sodnom, D.

2003 “Amidral bodol” Ulaanbaatar. (モンゴル語「暮らし、思い」)

DS：ドゥマギーン・ソドノム

IL：イチンホルローギーン・ルハグワスレン

KY：小長谷有紀

1 故郷の始まり

KY：私どもの招きに応じ、いらしてくださり、たいへんうれしく思います。モンゴル
国財務大臣、国家計画委員会委員長、閣僚会議議長、モンゴル人民革命党政治局員など
モンゴル人民革命党および国家の榮譽ある重要なポストを長年にわたって歴任された
ドゥマギーン・ソドノムさんにお目にかかる機会を生かして、モンゴルの社会、政治、
経済活動に関連した諸問題について自由なインタビュー形式でうかがいたいと思いま
す。今回のインタビューですが、子ども時代の思い出から始めるのはいかがでしょ
うか？生まれた年や場所、ご両親やごきょうだいについてお話しいただけますか？

DS：みなさんにお会いできてうれしく思います。モンゴルの黄金のゴビことドルノゴ
ビ県のバヤンムフ郡（現在のウルゲン郡）に「アルガル（牛糞）」という山があります。
この山の北方にあるガラムイン・ゴルという溪谷の中央部の西側に、北西から南東に
沿った丘陵があるのですが、その南側斜面にある「イリーン・ボーツ」と名づけられた
秋営地で、私は1933年、若い両親のあいだに生を受けました。

私はこの生地を1968年に母から教わりました。母が教えてくれなければ、私は自分
の生地を知らずに過ごしていたかもしれません。母が教えてくれたこの秋営地の、ゲル

を建てる敷地を訪れるたび、「ここが自分の原点である」という考えが思わず生まれるのでした。私を育て、支えた土地の丘、砂や土、そこに生えるまばらではあっても滋味豊かな草、ターナ（野生ニラ）やフムール（野生ネギ）の香りは実にすばらしいのです。私の子ども時代を慈しみ深く支え、ごく普通の暮らしや、人間味あふれた美しい心をくれた地元の人びとたちの偉大なる恩は決して忘れられません。

私は自分の生まれた日を知らないのです。当時は子どもの出生登録が行われていませんでした。母の話からおおよその当たりをつけ、のちに7月14日生まれとして登録し、国の「出生証明書」を発行してもらったのですよ。私の祖先にあたるツォーブゴイという人物は、西モンゴルのハンフヒーという土地で長年兵役に就き、そこで妻を娶り、帰郷したと言われています。2人は息子のひとりにツェデンという名前をつけました。このツェデンは「せむし」というあだ名だったのですが、ジャルガル、オヒン、ハンダという3人の娘をもうけました。ジャルガルの夫はゴムボという人でした。この2人のあいだにはツェベグ、ソソルという2人の娘と、ゴンチグという息子がいました。かれらの係累にあたる大勢の人たちが今のウルゲン郡に暮らしています。

ジャルガルの娘ツェベグの最初の夫はジャミヤン、次の夫はサムダンという人物でした。どちらの夫も敬虔なる僧侶でしたが、「政治的冤罪」を理由に処刑されたそうなのです。私の祖母であるツェベグは9人の子どもを産み育てました。ダンディア、デンデブ、マームという息子3人と、ドルマー、ボル、バラムツォー、ドラムスレン、ドルゴルスレン、ドゥゲルという娘6人がいました。彼らそれぞれに何人子どもがいたか私は知っています。ダンディアが1人、デンデブが11人、マームが3人、ドルマーが8人、バラムツォーが2人、ドラムスレンが6人、ドゥゲルが7人です。ドルノゴビ県の現在のウルゲン郡の東部地方、とりわけ「アルガル山（牛糞山）」の近辺で暮らす世帯の多くが「のっぼ」というあだ名だったデンデブと、その妹ドラムスレンの子孫なのです。私の父チョイジャムツは1905年、母ドルマーは1902年生まれです。ふたりはちょうど20世紀の幕開けに生まれ、父は1940年代まで、母は1973年まで生きていました。私は新たな千年紀、新たな世紀を体験できた幸運な人間です。私の回想は、ひとつの世紀におけるモンゴルの歴史をかいつまんでいるような印象を与えるかもしれません。モンゴル人の平均寿命はそれほど長くはありませんが、それでも十分な程度には延び、今度も延びていく未来があります。

私の母をドゥマ、父をチョイジャムツと紹介しましたが、父は人びとから「アルガル山の黄金のチョイ」という名前で知られていた人です。両親のあいだに生まれた子どもたちは次の通りです。ドルジンスレン（1923年～）、ビヤハル（1925年～1943年）、ジャムスラン（1927年～1994年）、ドンドブ（1929年～1985年）、パダルチ（1931年～1999年）、ジャムスラン（1930年～1992年）、ソドノム（1933年～）、ツァガーン（1936年～）。

私と、妹のツァガーンが今も健在です。祖母は1971年に92歳で亡くなりました。私

がまだ幼いころに亡くなった父チョイジャムツについて、その生い立ちや生きざまを時の権力や諸条件のために詳しく知ることができなかったことを残念に思います。父の姉はレグゼドマー、弟妹にはダンビーニヤム、ゾンドイ、ドラムスレン、ダムディンジャブ、チメッドといった人たちがいました。私の兄バダルチの遺した回想録によると、父はドルノゴビ県のサイハンドラン郡の人間だということです。父の母親はツェレンと言いました。ツェレンの兄のナワーンは僧侶で、「バヤムンフ寺院」に勤めることになった時、ツェレンの娘レグゼドマーと息子チョイジャムツをサイハンドランから連れて来ました。まもなくツェレンもあとから来て暮らすようになり、チュルテムという男性と所帯を持ったのです。私たちの祖父デンデ・ツェベーンは僧侶であったそうだと、兄バダルチは自分の回想録に記しています。

私の父はバヤムンフ郡の有名人で、何事にもそつがなく、聡明な人であったそうです。地元でもっとも壮麗な山の名前にちなみ「アルガル山の黄金のチョイ」とみなに呼ばれていました。モンゴルの著名な国家功労者であるソノミーン・ロブサン氏は同じ県のデルゲレフ郡の人です。S.ロブサン氏は父の知人でした。彼は「私たちはよくダーロー遊び（一種のドミノ遊び）をしたものです。父上は商売にも長けた利口な人でしたよ」と父について語っていました。モンゴルの国情が内外ともに混乱していた1930年代、わが国は国の安全を守るための活動、つまり海外での諜報活動に、国境地域に住む有能な人間を動員していました。当時、日本軍は中国を支配し、内モンゴル地域の駐留軍はわが国の安全にとって脅威となっていたため、祖国を守る活動にモンゴル人民は全力を注いでいました。

母はこう言っていました。「父さんは一度ならず、何日か家を空け、何らかの目的で出かけては帰ってきたの。どこへ何の用事で出かけ、何をするかは話してくれなかったけれども、国境を越えて特別な任務を遂行する仕事であることはだいたいわかってたわ。そのことは誰にも一切話してはいけなかったの」。思えば、父は商売や、行方がわからなくなった家畜探し、親戚に会いに行くなどの口実を作っては内モンゴル地域に行き、そこで情報を得る、とくに国境付近に駐留している軍関係の情報を収集する任務を遂行していたのでしょう。父は最後、1940年に「すぐ戻って来れるよう努力するが、遅くなるかもしれない。子どもたちをよろしく頼む！」と言い残して行きました。そして戻って来なかったのです。

1945年の終戦後、南方から大勢の兵士が帰って来たことを私は知っています。当時、同郷の行方不明者もかなりの人が帰って来ました。そのあとになっても帰って来る人がいました。私は幼いころ、父をジョージョーと呼んでいたのですよ。母と私はジョージョーが帰って来ることに大きな期待を寄せていました。そんな私たちの期待はしかし1960年代に裏切られました。父の弟にゾンドイという人がいました。ゾンドイ叔父もやはり1940年代の初めに行方不明になり、1945年に帰還したのです。ゾンドイ叔父は

1960年ごろ、私の実兄であるバダルチにある歴史を話したものです。チョイジャムツ兄さんは最後に出かける前、いなかで弟ゾンドイと会い「再び国境越えの任務を受けた。お前が代わりに行って任務を果たして来てくれないか？信用できる人間の代行が認められているんだ」と言いました。ゾンドイ叔父は代わりに行くことができませんでした。しかし、しまいには叔父も国境を越える仕事に動員されたのです。道中で捕らえられ、厳しい拷問を受け疲労困憊し、命は無事だったものの、私の知る限り体調は思わしくなく、歯が1本もなくなってしまったのです。1959年にゾンドイ叔父は私にこう言いました。「君の父さんは内モンゴルへ情報収集の役目を負って出かけたが捕らえられ、牢獄に監禁されて厳しい拷問に耐えたのだ。そしてその地で日本軍上層部の乗用馬を放牧する任務を遂行するようになった。このような任務の遂行中、ほか2名と脱走し、故郷の方向へ脱走した。何日も逃げ続けて疲れ果てた彼らはモンゴル国境の近くまで来て休息することにし、デルス（はねがや草の一種）の茂みで寝ていた。この時、地元民が彼らを見つけて通報したせいで捕まった。捕らえられた場所で拷問となった時、君の父さんはすべての過ちを自身が一手に引き受けて銃殺された。このことを私は国境を越える時に知ったが、守秘の宣誓をしていたため、君はもちろんほかの人にも話さなかったのだ。今だってそうだ。しかし、君は知っておくべきだ。複雑な事情を理解できる年齢になったからこうして話すのだ。知っておきなさい。しかし、この先を話す必要はないだろう」。

ゾンドイ叔父の話はずっと考え続け、1980年代に私は社会安全省（旧内務省）に向けて父チョイジャムツに関連した資料の有無を調査するよう要請しましたが、「当文書館には貴殿の父親に関する資料は存在しない」という回答でした。しかし、最近になり一部の新聞が私の父に関する興味深い記事を掲載するようになりました。すなわち、

1. 「81チャンネル」新聞の1998年第35、36号の「愛国者伝」欄にドルノゴビ県在住の人民委員バティン・サンジャーという人の書いた記事に「祖国独立のため国境線の彼方で数多くの男性が諜報任務を遂行した。そんな彼らのうち、旧体制下の閣僚会議議長であったドゥマギーン・ソドノム氏の父はアルガル山の黄金のチョイことチョイジャムツという人物がいて、祖国の指令により国外任務に就き、日本軍との銃撃戦の末、祖国の国境付近に辿り着くやいなや、モンゴルの天を仰いだ、これでよし、と言うや傷ついた自らを銃で撃ち死んだ」とあります。

2. 同新聞の1999年第07、08号では、ドルノゴビ県のハタンボラグ郡のマーニティン・ツェレンドルジという人の非常に短い記事が掲載されています。「愛国者の剛健な心臓は動き続ける。モンゴルの偉大な先人や諜報活動家は、祖国のために誠実に尽力した。小生は新聞を通じ、後世へ伝え、考えてもらうべくアルガル山の黄金のチョイについて記す。チョイジャムツなる人物はゴビの地で誰もが心惹かれる好男子であった。彼は本来ドンドゴビ県のゴルバン・サイハン郡の人間である。ドルノゴビ県バヤンムフ

郡のドゥマと結婚し、氏と同様の立派な体格で気立ての良い数人の息子に恵まれた。その時代、祖国の指令を遂行する過程で捕らえられたが、牢獄から脱走の末、モンゴル国境で捕らえられた。氏は捕らえられた際『モンゴルの故郷の蒼天を仰いだ、これでよい。日本のサムライの手にはかからぬ!』と自らの心臓を刺し貫き死んだ、堂々たる愛国者であった。息子は父親と同様に立派な体格で、のちにモンゴル国閣僚会議議長となったソドノムである」と書かれていました。

3. 「マシ・ノーツ (極秘)」新聞の1999年第39, 40号でR.ムンフトゥルという人が父チョイジャムツについて、まちががなくモンゴルの祖国功労を成し遂げた先人の1人であると評し、亡くなった経緯については、上で挙げた新聞の掲載記事と同様の内容が書かれ、私が父の名を姓として用いないことについて疑問をかかげていました。

これら新聞に掲載された記事を読むと、父は祖国のため闘った誠実な人民であり、祖国のために命を捧げた父を誇りとし、父について語り記すべきだという確固たる思いが生まれました。母が子どもたちに自分の名である「ドゥマ」を姓として名乗らせていたことは、当時の事情からすれば正しい決断だったのでしょう。

2000年にモンゴル国の「国民パスポート」を更新する際、私は、自分の姓名をアルタン (金の)・チョイ・ドマーギーン・ソドノムと登録し、父の名と称号を姓にすることにしたのですよ。

私はモンゴル国防省、中央諜報局そして国境警備軍の文書館から父に関する資料を発見していません。また、過去にモンゴルに駐留していたロシア軍の文書館からも発見できないのです。こうして私の資料探しは行きづまってしまいました。国が公文書を完全に整備し、保管、保護に正しく注意を払っていれば、国は国民を忘れることなく、国民が家族親族の係累を失うことなく、知っておくべき情報を整備できるものなのです。

2 学校時代

KY：あなたは何年に小学校に入学されたのですか？

DS：私は子ども時代を本物のすばらしきモンゴル人たちのあいだで送ったのです。兄たちのうちドンドブ、バダルチ、次兄のジャムスランの3人は養子に出されたので、うちには長兄のジャムスラン、ツァガーン、私の3人が残りました。私は母をオマーと呼んでいました。私たち一家はすばらしく仲が良く、助け合い、互いに思いやって暮らしていました。

私は1942年に小学校に入学しました。私が小学校に通うことになり、家族はバヤンムンフ郡の中心部に引っ越しました。上のジャムスラン兄は軍学校で学ぶためウランバートルに行き、妹のツァガーンと私は母と残りました。当時は独ソ戦争の時代だったので。ソ連赤軍を支援する動きが高まり、地元の人びとが自分の飼う馬の群れから

良い馬を選びだしてソ連軍に贈っていたことを私は知っています。モンゴル人はみな、防寒服、貴金属、お金、食糧といったものすべてをソ連軍に供出していました。モンゴル人民が贈った資本を元手に戦車部隊や空軍の特殊部隊を組織し、わが国の党や国家指導者、労働者の代表者が前線への調達活動を組織していたのです。バヤンムンフ郡中心部の近郊で、何人かのロシア兵が野生のレイヨウを捕まえて車に積んでいたのを覚えています。今思うと前線へ送っていたのでしょう。私は時どきそのロシア兵たちを訪ねていました。彼らはレイヨウの肉で作ったコトレット（カツレツ）を食べさせてくれたものです。タマネギやニンニクが入っていたので私たちがふだん家で食べている料理とはまた違う、変わっているけれど美味しいものでした。私たち子どもたちは彼らのところへ何度も行ってはコトレットを食べていました。それが生まれて初めてロシア人の顔を見て、ロシア人の作った料理を食べた体験でした。

兄ジャハルは1943年に肺炎にかかり、亡くなりました。当時、科学的な治療を行う病院が地元にはなかったので手のほどこしようがなかったのです。母は子どもたちを学校で学ばせるために努力しつづけました。当時、母は学校で「火焚き人」の仕事をして生計を立てていました。私たちの誰に対しても家畜を放牧しろとか学校を後回しにしろと言いませんでした。兄ジャハルが18歳で亡くなった時、母はたいそう悲しみ、時には放心状態になっていたのを私は鮮明に覚えています。私たちは母を心配し、同情し、苦しみをどうにか減らしてあげようと腐心しましたよ。この兄が健在だったら、今ごろは80歳近くになっていたでしょう。

学校の夏休みに私はデンデブ兄のところへ行き、家畜の放牧をしていました。そこには父の遺した馬が何頭かいたのです。祖母ツェベグが同居していたので、私が行くのはごく当然のことだったのですよ。私は小さいころからラクダの放牧をしていたので愛着を持つようになりました。早朝、ラクダの群れを放牧地に連れていき、日中ずっとそばにいて、昼時に家に戻って食事をし、戻って日が暮れるころに家畜囲いに連れ戻していました。私は小柄だったので、外で馬から降りると、また乗るのが一苦勞でした。ですから岩や高い崖を探し、そこに上ってあぶみに足を乗せて馬に乗っていたものです。あのころのように常に家畜を放牧する伝統は今では失われてしまったようです。この伝統を復活させることはとても重要なことですよ。モンゴルはラクダを守り育てることができれば、モンゴルのみならず人類の歴史に認められる徳ある人びとになれるのだと言いたいです。世界にはフタコブラクダとヒトコブラクダがありますが、フタコブラクダはモンゴル、中国、カザフスタンにのみ生息しています。他の国や地域にはいません。絶滅してしまったのです。

秋になって学校の夏休みが終わると、親たちは燃料にする薪や牛糞を積んだラクダの行列に子どもを乗せ、郡の中心部に送り届けていました。ゴビの県中心や郡中心で暮らす人びとは燃料にする牛糞を貯蔵しているのが燃料に困らないのは驚くべきことです。

よ。第2次世界大戦になると、至るところで災害が起きていましたが、バヤンムンフ郡の人びとは芸術を忘れずにいました。県のクラブ（のちに県文化宮殿と改称）所属のユンデンという芸術家が私たちの郡を訪れたことをよく覚えています。彼は映画を上映していました。当時の映画は無声映画でしたからユンデン氏が映画の筋を朗々と説明していました。ユンデン氏は多芸多才な人でした。何種類もの楽器を弾くと同時に、詩の朗読やユール（祝詞）やマクター（賛詞）を述べることもできました。今で言えば、良くできた1人劇団だったのです。彼の芸に、郡中心の子どもたちも大人たちも笑い、楽しんでいました。バヤンムンフ郡では赤レンガの素敵な建物の中に「赤い部屋」がありました。その赤レンガの建物には木の床がなく、天井のかわりに模様のついた布が張られていたものです。郡の「アマチュア芸術家」が時々芝居を上演していました。郡中心ではマンドリンを演奏する人が少なくなく、集まって小さな演奏会を催していました。

私の師グンセンノロフ先生は組織力に優れた良き教育者で、人びとを楽しませ、良い雰囲気づくりのできる聡明で有能な人でした。一度、郡の「赤い部屋」でモンゴルオペラの最高傑作となった「オチルタイ・ゴルバン・トルゴイ（悲しみの3つの丘）」がいかなるものであったかをいささか大げさに語り、人びとを楽しませていた光景を鮮明に覚えています。「オチルタイ・ゴルバン・トルゴイ」の上演の知らせが地元一帯に広まり、人びとは郡の「赤い部屋」に集まりました。しかし、舞台の幕がいつまでたっても上がりません。観客は待ちくたびれて「早く始めてちょうだい！牛の乳搾りの時間になってしまうよ！子牛を母牛に添わせる時間になってしまうよ！」とせかしました。すると、幕の隙間から「赤い部屋」の責任者が顔を出すと、「楽器演奏者が来られなくなりました。マンドリンの伴奏でオペラを上演することにいたしました！」と言いました。観客は不満でしたが、他の楽器がないなら仕方がなく、マンドリンの伴奏つきオペラを観ることを了承しました。こうしてオペラが始まりましたが、上演はうまくいき、観客も熱心に観ていました。あなたがたは「オチルタイ・ゴルバン・トルゴイ」の筋を良く知っているでしょう。ユンデンが旅から戻って来るのをバルガンの指示で待っている2人のこわがりか歌い終え、ユンデンを打ち倒す場面になりました。すると役者が立ち位置をまちがえたのか、舞台の一方にユンデンが、もう一方に2人のこわがりか並んで立っていたので、ユンデンの代わりにゴビの子どもを羊の放牧に持っていく木の鞭で叩いたそうです。ところが観客の中から1人のお爺さんが「ああなんてこった、お前さん、ぶつ相手を間違ってるじゃないか。まあしょうがない、転べ、転べ」と大声で言いました。すると舞台の一方にいたユンデンがしかたなくくるくる回って倒れました。強く倒れたので、埃がもうもうと舞い上がったのですよ。こうしてオペラはうまくいき、人びとを笑わせ、楽しませ、閉幕となりました。こういう話を先生は自分が演じているかのようにおもしろおかしく語り、みなを楽しませていたのを私はよく覚えているのです。

気持ちをすばらしく通い合わせて暮らしていける、真心あふれる人びとのあいだで、私の子ども時代はとても穏やかに過ぎていったのです。当時の私はリンベ（横笛）を覚え、歌も歌っていました。知っているすべての歌をリンベで吹いていたものです。1945年の秋、アルガルを積んだラクダに乗り、郡の中心の学校へ向かう道中、私はリンベを吹いていましたが、夕方になってラクダの上で眠ってしまい、落として失くしてしまったのです。以降、リンベを持つことなく何年も過ぎたのちに吹く機会があったのですが、曲を奏でるところか音を出すことすらできませんでした。もし、私がリンベを失くさないか、別のリンベを手に入れることができたら、興味はとても強かったのですが、良いリンベ奏者になっていたでしょうかね。当時の私はリンベを肌身離さず持っていました。それから私は絵も得意でした。子どもに楽器の演奏、絵、歌の才能があり、子ども自身も興味を持って取り組んでいるのを両親が認めたなら、その才能を伸ばすことに注意を払うべきですよ。現代はもっと条件が良くなっているのですから、「子どもの才能を伸ばし、励ますのに何も惜しむことなかれ」と言いたいですね。

私は娘ナージャと息子トールチに楽器の演奏を学ばせるつもりで、ピアノとアコーディオンを買い与え、先生を雇ってみましたが、2人とも興味を持たず、耳も良くなかったのでそのうち使われなくなってしまいました。孫娘のナターシャ（ナージャの娘）は楽器の演奏や歌の才能はありませんが、音楽をよく分かっています。しかし、トリーヤ（トールチの愛称）の娘のダリ・エルデネは耳が良く、楽器の演奏を覚えることに興味があり、才能もあるので、2000年から先生をつけてピアノを習わせています。しっかり学ぶことへの興味と才能があるのを目にし、上手に演奏しているのを聴きながら、妻ヴェーラと私は喜んでます。私の家系は楽器の演奏や絵を描くこと、つまり芸術に長けた人間がいるはずなのです。楽器を弾き、歌を歌い、絵を描く人びとは、人間らしく、他人に良い影響を与える面で優れているように思います。いずれにしても、このような人びとは美を享受することに長けているのです。

KY：あなたは芸術方面の学校に進みたいと思っていらしたのですか？

DS：そうだと行ってよいでしょう。私はドルノゴビ県のバヤンムフ郡の小学校を1946年に卒業しました。上のジャムスラン兄が私を芸術学校に入学させようとウランバートルへ連れていきました。首都へ行く前、こんな珍妙な出来事が起きたのです。同郷のバルダンドルジという少年と私は小学校を同時に卒業し、県中心に来ました。私はウランバートルの学校への入学を、バルダンドルジは県に残ることを希望していました。ところが、県知事がツァガーンと私をそれぞれの母親と共に部屋に呼び、私が県の学校に残り、バルダンドルジがウランバートルの学校に行くように言ったのです。私たちは泣き、母親たちはひたすら拜み倒していたところ、ちょうどその部屋にある人が入って来ました。その人は私たちを見て、「この子たちはどうして泣いているのだ？」と尋ねました。知事が事情を説明しましたが、その大柄な人は「この子たちをそれぞれ

の要望に沿って進学させなさい！」と言って出ていきました。こうして私がウランバートルに進学する話は決まりました。その部屋で私たちが泣いているところに入って来た大柄な人は、ドルノゴビ県のモンゴル人民革命党の第1書記を務めるチョイジャムツという人でした。のちに1970年代にチョイジャムツ氏がモンゴル人民革命党の中央委員会統制委員会に所属していた時、当時のことを話したら、まったく覚えていないのです。私たちにしてみれば人生に関わる大きな問題ですよ。私は彼に感謝の意を表すと、チョイジャムツ氏は「誰かが君にとって有益になったのなら、そのことを大小にかかわらず忘れずにいることこそは人徳というものだよ！」と語っていたものです。私の方が成績が良いということで県知事は私を県の学校に残そうとしていたようです。私の幼友達バルダンドルジはドルノゴビ県に残り、その後1970年代に「県最優秀牧民賞」を受けて名を上げました。私たちは会うたびに互いの近況を語り合うのが好きでした。彼は1990年代の初めに故人となりました。バルダンドルジの奥さん、ガーリャは大勢の器量良しな娘さんに囲まれてウルゲン郡で暮らしています。山羊を中心に家畜をたくさん持ち、十分な暮らしをしており、働き者で良い人たちです。

1946年の秋、私はトラックにはほかの大勢の人たちと乗り、道中「ジャンジン・チョイル」という土地の「道の宿」で1泊し、ウランバートルに出て来ました。良い車、良い運転手に当たったおかげで道中支障なく、早く着いたのです。私たちは今の「バヤンズルフ」役場の近くにあった木の橋を渡ると車から降り、土や埃にまみれた顔や手を洗っていました。ゴビの人間は、流れる水を初めて見て、「もったいない！流れてなくなってしまうのだろうか？」と驚いていました。ウランバートル市に来てジャムスラン兄は私を芸術学校に入学させようと、私を連れて街中を歩いていました。そして、私たちがそのような学校を見つけられないしていると、母方のおじであるマームが「俺の通っていた学校が近くにあるから、お前はそこに入りなさいよ」と私を「財政経済専門学校」に入れてしまいました。「算数」と「読み書き」の試験を受けたのち、専門学校の教師だったツェレン氏に呼ばれ面会しましたが、「君はまだ子どもだ。あと1歳増えて17歳で学び始めるのが筋だから、予科で学びなさい」と言いました。こうして予科で学びながら年齢が1歳増えるのを待っていたその年の私の主な課題は「算数」と「読み書き」の授業の復習と、母への手紙を書くことでした。財政経済専門学校のゾル校長、ツェレン先生のほか、トゥメン、タガル、ダシャー、ドルマー、デジドマーといったすばらしい先生がたはのちに「モンゴル人民協和国功労教員」になりましたよ。ゾル先生はのちに建設副大臣の職を長く務められました。私の学校は著名人を大勢輩出しました。

学生時代、共に学んでいたB.ヤボーホランとTs.ガイタブはモンゴルのみならず世界的に有名な詩人、作家になりました。1950年代、60年代にモンゴル人民革命党はTs.ガイタブを政治的作品の創作に動員していました。もしTs.ガイタブが今のように自由に

創作活動ができたなら、素晴らしい作品を多数残したでしょう。

B.ヤボーホランの詩は、今ではメロディーをつけて歌われたり朗読されています。モンゴル人は彼を「東洋の偉大なる詩人」と称えています。私はそんな偉大な人と共に学び、同時代を生きていたのに、当時は気づかなかったことが今になって悔やまれます。1981年12月17日、「モンゴル作家委員会」委員長のS.オドバル氏が私を作家の会合に招待し、「モンゴルの社会、経済問題について語ろう」と提案しました。当時、私は「国家計画委員会」の委員長を務めていたので情報をたくさん持っていたのです。私は可能な限り詳しい情報を提供し、長期的な政策による計画について率直に話しました。この会合の終わりに『モンゴル詩作選』の最初のページに22人の作家がサインしてくれたのを、私は今も大切に持っています。その日はB.ヤボーホランと会った最後の日で、彼からもらった唯一のサインがその本にあります。

財政専門学校で私の1つ下の学年だったミヤースレン、ツェベルスレンらは芸術関係の機関に生涯勤め、作曲家、俳優として名を馳せました。

1946年に初めてウランバートルに出てきた時、私は13歳でした。マームおじの家で初めてジャガイモの入った料理を食べたことは忘れられません。土臭い味のする、奇妙なまずいものでしたよ。

3 イルクーツク留学

IL：あなたは何年に財政専門学校を卒業したのですか？

DS：1950年に私は「国家機関付き会計士」という専門で財政専門学校を卒業しました。入学した年から卒業までの4年間、学校の寮に住んでいました。生活の知恵や人びとのあいだでの身の処し方について学んだ、私の初めての人生の大学は財政専門学校の寮生活でした。私が小学校に入学した1942年から、ドルノゴビ県の諸学校でキリル文字を教え始めたのです。ですから私は「モンゴル文字」を習っておらず、独学によって少しだけ読めるようになりましたが、達者に読み書きができなかったことをとても心配していました。専門学校の予科に学び、1947年夏、バヤンムンフ郡へ休暇のために戻り、秋に母と妹のツァガーンと共にウランバートルに来て、母を恋しく思うことなく学べるようになり、1950年に卒業したのです。

あの秋、母がウランバートルへ出て来る際、バヤンムンフ郡の中心地にあった家をもそのまま置いてきました。帰るつもりだったのですが、無理でしたね。その家はそうして朽ち果ててなくなってしまいました。家にあった私の「蓄音機」、そのうしろの空間に入れて置いてあった四角い線の入った分厚いノートの中に父の唯一の写真があったのですが、それもなくなってしまい、見つけられなくなったことをとても残念に思っています。

夕日のオレンジ色の光がさして温かく気持ちの良い夕方、ずっと離れた南西の方角から馬に乗った人が駆けて来るのを見て母が「父さんが帰ってきたわよ！」と言いました。私たちは父を大喜びで迎えました。その時、父が例の写真と蓄音機を持ってきてくれたことを忘れません。まるい模様のついた絹のモンゴル服を着て、威風堂々と座っている素敵なその写真が見つかったなら、私の1番の宝物になったでしょうね。昔のモンゴルの歌が収録されたレコードが3～4枚と共にその蓄音機が元に戻ることなく失われてしまったことはしかたありません。こうして、父の思い出の品々は失われてしまったのですよ。おおよそ8×12cm程度の大きさだった父のその写真が「バヤンムフ郡のどこかの家の額縁の裏側や、つづらの底にたまたま保管されて残っているだろうか？」と時には期待します。

財政専門学校を卒業後、私は財務省に配属されました。当時、絵を描くことのできる私が必要だったのです。学校の卒業生たちのために開かれたパーティに、デムチギン・モロムジャムツ財務大臣、ダンガー人事長が出席しました。ダンガー氏は私を呼び、D.モロムジャムツ大臣に紹介し「この子は絵がとても上手なのですよ。私は財務省への採用を決めました。財務省の『壁新聞』を作らせましょう」と言っていました。こうして私は幸運にも財務省に採用され、勤めることになりました。絵を描いたり、歌を歌ったり、楽器を弾いたりといったことに熱心だったことが人生の幸運をもたらしたのです。私はモンゴル国財務省の黄金の敷居を初めてまたいでから半世紀が過ぎました。私は最初に監査局で監査官となりました。ミシグという人についてウランバートル市の縫製工場で書類調査に参加しました。これが財務監査の初めての仕事だったのです。この仕事は自分にとってはおもしろみがなく、退屈に感じられました。この部署に私は4年間勤務しました。

この間、ソ連留学が片時も頭を離れませんでした。10年制の第2学校の夜間部で3年間学び1953年に卒業し、最終学歴が10年制学校卒となりました。週6日、朝9時から夕方5時まで財務省で仕事をし、夜6時から12時まで10年制学校の夜間部に通っていました。ここを卒業した年、ソ連留学の「入学試験」を希望したのですが、モロムジャムツ大臣からロシア語の「試験」をされて落ちてしまいました。それから1年後、1954年の秋、イルクーツクの財務学院への留学が割り当てられ、何人かの仲間と共に列車でイルクーツクへ向かいました。私はソ連留学の「入学試験」を受験してから飛行機でズーンバヤンへ行き、母を連れてウランバートルに戻って来ました。これが母と私の飛行機初体験でした。私がイルクーツクに行くことになったので、母はドルノゴビ県のズーンバヤンにある石油工場に勤めていたジャムスラン長兄のもとへ行っていたのです。こうして私はイルクーツクへ旅立ちました。旅客列車の車両全体で何百人もの若者たちと共に笑いあい、歌い、騒いでいるうちに2日間の旅は終わり、イルクーツクに到着しました。

イルクーツクの財務学院は、私たちを一番良い寮に住まわせ、学び、暮らすためのすべての環境を整えてくれたのですよ。私たちは課外活動として行われる行事に積極的に参加し、ロシア人学生らと親睦を深め、彼らのおかげで短期間でロシア語が上達しました。私はロシアの歌を歌うのが好きでした。

イルクーツク州のアマチュア芸術家フェスティバルに2度参加し、入賞した時に授与されたメダルは私のもっともすばらしい宝物になりました。1度、私の歌ったモンゴルとロシアの歌2曲をイルクーツクからモンゴルのラジオへ放送してくれましたが、母は聴いたことを手紙に書き、私に会ったのと変わらないものだったと語っていました。私は大学の「壁新聞」を製作し、祝祭時には校舎の装飾も担当していました。またバレーボールの試合すべてに参加しました。

イルクーツクの財政学院を卒業したモンゴル人は大勢います。1934年から1938年にかけて、初めてY.ツェデンバル氏が同校を卒業したのですよ。その後、各時代にモンゴル国財務省の大臣を務めたD.モロムジャムツ、Ts.モロム、S.ビヤムバジャブ、D.ソドノムといった諸氏がこの大学を卒業しました。

4 財務大臣時代

KY：あなたは何年にモンゴル（人民共和）国財務大臣に任命されましたか？

DS：私は大学を卒業して1958年7月にモンゴルに戻り、財務省に復職しました。ドゥゲルスレン財務大臣は、設立されてまもない「通貨課」の課長に私を任命しました。当時モンゴルでは国家通貨であるトゥグルグと、広い交流を持つ社会主義諸国の通貨との為替レートが決まっていなかったため、国家間の決済が困難でした。国際市場価格や自由通貨を国家間決済に用いず、資本主義国と名づけられた国々との貿易や経済交流がほとんどなく、交流のある社会主義国との貿易決済を振替ルーブルで、非貿易決済は各国通貨間で決めたレートを使用し、国家通貨で算定した非貿易決済による差損は、特別な係数でもって振替ルーブルに換算したうえで貿易決済に組み入れて処理していたのです。社会主義諸国では国家通貨間の為替レートを決定する際には、選択して取り決めた品物やサービスの品目と数量を、2国間の国内価格と国家通貨を用いて評価し、比較する手法を用いていました。品物やサービスの品目、数量、価格を選択し、取り決める過程で、自国の通貨レートが強くなるよう努力していました。

1958年秋にルーマニアとのあいだで初めてトゥグルグとレイの為替レートを取り決めるため、ブカレスト市に派遣されました。ルーマニア滞在中は、外を歩いて価格調査を行い、実に多くのパターンの計算をしました。夜寝ていても、ふと気がつくと頭の中で計算をしていて寝つけませんでした。それで起きだして紙に計算を書いていました。その後は随分経験を積み、2年間で全社会主義国の通貨とトゥグルグの為替レートを

算定しましたが、これは長いあいだほぼ変わることなく使用されていたのですよ。

財務省は私に仕事を教えるのと同時に、生活の向上にも便宜を図ってくれました。留学から戻って1年後、ウランバートル市中心部の第1ドゥチン・ミャンガト地区に広い部屋が2つあるアパートを提供してくれました。妻ヴェーラと私は1958年7月に、大学の最終卒業試験を受けた日に婚姻届を出し、学生寮でモンゴルとロシアの友人数人を呼んでささやかな結婚式をあげ、アングラ河畔で夜通し宴会をしました。その翌日、ヴェーラはアルタイ地方のスラヴゴロド市にある実家へ戻り、私はウランバートルへと2方に分かれましました。それから1年後、ヴェーラがウランバートルに来る前、財務省が住居を提供してくれたのですよ。ヴェーラはウランバートルに来てから1959年に「ウランバートル鉄道局」の計画課で「上級エコノミスト」の職を得ました。そこで32年間勤めあげ、定年退職しました。

私は財務省通貨課の課長を5年勤めました。1963年4月のある日、ドゥゲルスレン大臣が私を呼びました。大臣の執務室に入ると「一緒に出かけるぞ」と言うのです。そうして政府庁舎の方へ向かいました。道中、大臣が「これから君と私はモンゴル人民革命党中央委員会政治局会議に出席することになるだろう。私を閣僚会議に登用することだ。私の代わりに君を財務大臣に任命する話が出ている」と言いました。私はこんな話を突然聞かされ、恐れ驚きました。まず、そのような責務を遂行することは無理だろうという考えが浮かび、大臣に伝えました。ドゥゲルスレン大臣の言葉は「君は育成された人材だ。この仕事をこなせるはずだ。はじめは経験が足りないだろう。しかし、財務省の人びとは良い人間だ。彼らの助けを得て働けば、短期間で経験が積めるのだ」という短いものでした。モンゴル人民革命党政治局の会議が始まり、ドゥゲルスレン大臣は閣僚会議副議長に任命されました。その後、財務大臣への私の任命が提案されました。Y.ツェデンバル氏は私を一瞥すると「私はこの人物に見覚えがある。質問や意見のある者はいるか?」と言いました。全員の視線が私に注がれるのを感じました。私に質問をしたり、意見を述べたりする人はいませんでした。Y.ツェデンバル氏は私に「君には言いたいことはあるかね?」と言いました。

私は「大臣を務めることができないのではと恐れています」と言うだけで、ほかに言葉が見つかりませんでした。Y.ツェデンバル氏は「国務大臣を務められないのではないかという君の慎重さを私は理解している。君には可能なはずだ。われわれは君を支援する」と言い、「では承認するか?」と言って決定してしまいました。Y.ツェデンバル氏は当時、一度見かけた、会った人を忘れない方だったのです。会議ののち、ドゥゲルスレン氏と私は財務省に戻り、全職員を招集して通知しました。本当に誰も予想しない人事だったのです。ドゥゲルスレン氏は財務省でのその会合の前、すべての人に聞こえるように「会議は私が進行するかね?君が進行するかね?」と尋ね、私たちが何について話そうとしているかを全員に容易に理解させました。ドゥゲルスレン大臣は聡明な方

だったのですよ。こうして私は30歳の若輩ながら財務大臣に任命されました。

5 対ロシア債務問題

KY：対ロシア債務問題について、もう少し詳しくお話いただけませんか？債務の発生要因は何だったのですか？

DS：国家の経済社会政策の策定と計画，実施内容の調査・評価，各セクターの連携や均衡保持問題を集中的に決定する中央機関が「国家計画委員会」でした。

権力を掌握していたモンゴル人民革命党中央委員会や，モンゴル人民大会議および政府の方から，経済中央機関である「国家計画委員会」の業務が強固となるよう特別な注意を払い，高い要求を課していたことは，単に「集権的計画経済体制」の時代だったからではありません。国家の戦略政策を策定するこのような中央機関はいかなる体制の時代であれ，存在すべきであると解説されています。

1990年代初期は，経済や社会を分析して政策を策定する必要や，国家の役割を否定し，すべてを市場に委ね，国民の生活を調整なく放置すべきではない，と気づかずにいたため，計画経済に関わる諸機関を根本から廃止し，中央や地方で活躍していたあまたの有能な経済，財政専門家らを不要品のように扱ったように思われます。彼らの知識と経験を新しい条件下に活用しなかったことは残念なことです。

計画経済や中央機関は国家にとって重要でしたが，今後も重要となるという確信が私にはあります。行う仕事や手法が変わるべきであることは当然ですが。

Y. ツェデンバル氏は1969年12月に私を財務大臣から解任し，「国家計画委員会」第1副委員長，国務大臣の職に任命する際，「国家計画委員会」の強化，投資効果の増大，とくに外国の援助借款により実施される事業の実現可能性を確実に策定する特別な必要性を強調し，有能に勤め上げることを課していました。この瞬間から私の人生は計画経済と密接に結びついたのでした。

モンゴルの発展に必要で，有効であることを根拠や計算によって証明し，社会主義国と呼ばれた国々の経済社会政策を審議，調整する作業において精力的に働いた結果，ソビエト連邦および他の社会主義諸国とわが国との経済交流は拡大し，それらの国々からわが国に供与される援助や低金利借款が急激に増えました。

たとえば，ソ連だけについて言えば，モンゴルの経済，社会発展のために1971～1975年のあいだに約4億5,000万ルーブルの援助借款が供与されていましたが，根拠計算が向上したおかげで1976～1980年にかけては14億，1981～1985年にかけては32億，1986～1990年には35億振替ルーブルの援助借款を受けて活用していました。

このように1976年以降14年間，年利2%，5年ごとの状況により過去の借款の償還期間を40年間まで延長，無利子化など，かなり優遇された借款によってモンゴルに数

多く建設されたインフラ、産業、社会関連施設は現代のわが国の経済、社会生活の重要な基盤となり利用されています。

経済、社会の長期発展計画を策定し、長期的な視点で外国の借款や援助を活用できたおかげで、わが国は1970～1990年のあいだに経済を強化し、多くの社会問題を成功裏に解決しました。

モンゴル人民共和国の国家収入は1960～1970年にかけて30%の伸び率でしたが、1970～1980年は80%、1980～1990年は65%でした。国家収入の年平均成長率は1970年までの10年で2.7%でしたが、1980年までの10年間では6.1%、1990年までの10年間は5.1%でした。現代ではこのような成長率の維持は夢となっています。

産業の基礎セクターも先に述べた期間中に成功裏に発展したと言えます。農畜産物の生産量は1970年および1980年までの各10年間に8～14%増加しており、1990年までの10年間で45%増加しました。農牧業は天候に大きく左右されましたが、多面的な対策により、畜産物や作物の生産量は一定ではなかったものの、途切れることなく伸び、大部分を輸出に回していました。

工業製品の生産量の年平均成長率は1970～1990年のあいだ7.2～8.7%でした。

ソ連からモンゴルに対し、1976～1990年までの期間に100億振替ルーブル近い援助借款を受け、インフラ設備や多くの主要産業施設を建設し、経済、社会発展の重要な基盤を整備してきたことを、単なる計画策定の改善と説明してはいけません。国家政策の条件や要因が影響していたことは明らかです。何十年も影響下にあったモンゴルが後進国のままでいることはソ連の望むところではなく、1970年代から援助借款を受ける機会が多くなったことと関係があります。ソ連や旧社会主義諸国が市場を自由にしてくれたことは、わが国の経済発展、輸出の増加にたいへん重要な意義を持っていました。

モンゴルの国家権力を掌握していたモンゴル人民革命党執行部、とりわけY.ツェデンバルのとった政策、精力的な活動、権威が、わが国の対外関係、経済発展に大きく寄与していたことは評価すべきです。

ソ連から1990年までに供与された振替ルーブルによる借款の債務履行問題を現在のロシア連邦といかに調整して解決するかは、わが国の若い世代が直面している難問です。

債務が発生した当時の両国関係において、経済関係の問題決定には政治的力が大きく働いていました。貿易によって相互に供給していた物資やサービスの価格は、国際価格とは異なる形で決定され、長年にわたり変更されることなく固く遵守するのが習慣となっていました。物資やサービス、援助借款により建設する施設の価格を、多くの場合、一方の、たとえばソ連側企業の提案によって決定するのが慣わしでした。また、当時使用していた振替ルーブルの対自由通貨為替レートが、実際の購買力に基づいたものではなかったことなどを考慮し、借款総額の再計算や、さらに社会領域に対する借款の

債務軽減についてモンゴル側から何度も出された提案が考慮されるべきです。

モンゴルの多くの知識人、中でもエコノミストたちは、ロシア連邦との過去の債務問題を解決するにあたり、ロシア軍のモンゴル駐留時代、国際関係の慣例法に従い、モンゴル側に土地使用料を支払わず、占領していた土地の破壊や汚染を回復しなかったことや、モンゴルの多くの知識人や国家功労者らがスターリン独裁時代の害悪のため肅清、「処刑」されても謝罪なく過ぎたこと、1930年代に当時のソ連指導者の要求により大勢の罪なき僧侶が迫害を受け、何百もの寺院や文化財が破壊されたことなどを考慮すべきだという考えを表明し続けていますが、それは妥当でしょう。

仮に過去の関係の歴史について、特殊な関係であったことを熟慮し、過去の債務のうち合弁工場を建設する際に供与された借款以外を基本的にすべて免除する合意に至れば、両国国民が信頼と尊敬を高め、隣国との今後の協力に実に良い影響を与える慈悲深い行為になるだろうと考えます。

6 ツェデンバル氏の更迭

IL：1984年8月に実施されたモンゴル人民革命党第8回総会で、Y.ツェデンバル書記長が解任されたでしょう。この問題において、当時あなたの立場はどのような位置にあったのですか？

DS：モンゴル人、とりわけ国家指導者は国家や社会に捧げる精神が統一されていなければなりません。統一がなく、地位や利権をめぐる争った弊害でモンゴルは多くを失っていました。発展の道を選択した1924年に、異なる思想を持つ人びとを処刑していたことに始まり、1930年代の大肅清時代、それ以降の地位や利権をめぐる対立がもたらした害が、現代になって語られて書かれている主な理由は、肅清の再発や無秩序に対する警告のためでしょう。地位や個人的な関心のために国家社会の利益を放棄する人びとのあらゆる悪行が不調和を生み、肅清の再発に至らしめることに注意すべきです。

Y.ツェデンバル氏が1984年に全役職から解任された詳細な理由を、私は当時ではなく、のちになって知りました。いくら物忘れがひどくなくても、どれほど精力的に活動するには年齢相応に衰えが認められても、重要問題の決定時にはツェデンバル氏が最終的な発言をしていて、彼の取り巻き連中はツェデンバル氏がどんな発言をし、どんな決定を下すかを待ち、無言で承認していたのは明らかです。

Y.ツェデンバル氏は自らの能力の衰えを実感していたでしょう。忘れたことを思い出させ、助言し補佐するに相応しい信用できる一部の人、とりわけA.I.フィラトワ夫人の言葉を疑わないので、彼女の影響下にすっかり入ってしまったように思われました。一方では、党や国家の指導者という重責を離れ、年金生活者として一般市民と同様の生活を送る運命について考えて自ら提案を行うことができなくなるほど観念が固定してし

まっていたのでしょうか。

モンゴル人民革命党中央委員会政治局時代の同僚は、ツェデンバル氏が以前と同様に精力的に活動し、国家社会の命運に関わる重要な問題に正しい決定を下す能力が失われたことや、彼の妻A.I.フィラトワが党や国家を引っ掻き回していることに気づいていながら、あえて近づいて指摘することはなかったこともまた明らかです。

Y.ツェデンバル氏の健康状態や執務能力にあらわれた変化を家族が、とりわけA.I.フィラトワ夫人が熟知し観察していたことは疑いのない事実です。彼女ははじめ、ツェデンバル氏に忘れていたことがあれば思い出させ、助言を行う程度の補佐をしていましたが、彼女の行動はさらにもっと大胆になっていったのです。彼らはY.ツェデンバルの名前でモンゴル人民革命党、モンゴルの党や国家事業を指導し、支配する人間となってよいのだと理解していたようです。

Y.ツェデンバル氏がしばしばポケットに入れた小さな紙片にメモしたことを見ながら指示を与えていたのを私たちは見ていました。誰かが書き、また誰かの提案による方針によって問題を解決していたのだろう、という考えが生まれます。夫人の激しく粗野な性格や、彼女が国家、モンゴル人民革命党の諸事、とりわけ人事に直接関与していたのを多くは知っていたものの、まちがった行為を禁じる人間はいませんでした。

もし、多くの人びとを驚かせて不快にさせていたA.I.フィラトワの行為が1984年以降も継続していたら、モンゴルの国家をY.ツェデンバル氏の名のもとでA.I.フィラトワ夫人が指導していたことになっていたでしょう。

いずれにせよ、ひとつ明白なことは、Y.ツェデンバル氏の家族、A.I.フィラトワ夫人は、彼をモンゴル人民革命党、国家の最高の地位に永遠に置き、仏のように崇拜させることに腐心したのです。Y.ツェデンバル氏が1990年までモンゴル人民革命党、モンゴルの国家指導者の地位に変わらずにあったとしたら、民主革命の高揚に対してY.ツェデンバル氏とA.I.フィラトワ夫人がどう対処していたか、何通りか想像することができます。

Y.ツェデンバル氏を生涯、モンゴルの国家、モンゴル人民革命党の指導者に置こうとするA.I.フィラトワ氏の関心と、モンゴル人民革命党中央委員会政治局員で閣僚会議第1副議長であったD.マイダル氏の自分が閣僚会議議長になりたいという関心とが一致していたのですよ。Y.ツェデンバル氏の執務能力の衰えをD.マイダル氏は自らの昇進のために利用し、その障害となる人びとを追放する行為があったことが文書として残っています。A.I.フィラトワ、D.マイダルの両氏がモンゴル人民革命党中央委員会政治局員、中央委員会経済問題担当書記長D.モロムジャムツおよびその他のエコノミストを更迭する方法や口実を考え、モンゴル・ソ連の経済関係問題に関して出された意見を歪曲し悪用しようとしたことがのちに明らかになりました。当時、私は閣僚会議副議長、モンゴル国家計画委員会委員長を務めていました。モンゴルの経済・社会

状況を評価、分析し、今後の発展計画や政策を策定する任務に従い、現状を党、国家の指導者に報告し、モンゴルの国益に関する提案を行っていました。

モンゴル人民革命党中央委員会政治局に1983年に提出した資料に、モンゴル・ソ連の経済協力に関連する問題のうち、モンゴル・ソ連合弁のエルデネト工場の事業と関係した問題について提案しました。エルデネト工場に関する私たちの提案は次のようなものです。

— エルデネト合弁工場からソ連へ輸出した銅鉱石の対外貿易価格を上げることを根拠として、モンゴル対外貿易機関から合弁工場への支払価格と輸出価格の差額分をモンゴル国家予算からエルデネト工場へ補助金として交付し、その補助金を含めた利益を2国間で分配するという誤った慣例を改める。

— エルデネト合弁工場からモンゴル国家予算へ天然資源利用料を支払わせる。

— これらの問題が前向きに解決されない限り、合弁企業の新規設立にあたり、今後モンゴル側の支持、関心は得られない。

私たちの提案には、エルデネト合弁工場が高い利益を生み、モンゴルの輸出品の中で大きな位置を占めていることを否定するものは一切なく、否定する根拠もありません。実のところは、10年前、エルデネト工場建設に際しての最初の協定をマイダル議長が勝手に誤って結んだ失策を正すため、何年も続けてきた話合いの続きだったのです。

ソ連非鉄冶金省および政府間委員会のソ連側の一部は、エルデネトに関する私たちの提案受け入れに難色を示し、協議を希望しませんでしたし、モンゴルのエコノミストたちが受け入れ根拠のない提案を行っているという含みがソ連共産党中央委員会に伝わっていたのですよ。ソ連共産党中央委員会はその情報を知り、指示に従い、当時のソ連国家計画委員会の課担当者（のちの首相となる）V.パヴロフを団長とした代表団をモンゴルに派遣しました。V.パヴロフおよび当時わが国に駐在していたソ連特命全権大使S.パヴロフ、言い換えれば問題に非常に現実的かつ誠実に対処する2人のパヴロフは、協力して問題の原因を解明し、私たちの提案を根拠ありとみなし、モンゴルの国家予算から銅精錬工場への補助金交付を廃止しました。この問題を、ソ連への銅鉱石供給価格を上げ、国際市場価格に近づける方法で決定する特別議定書が1984年6月末に調印されました。モンゴル天然資源利用料金を合弁工場に支払わせる問題は、1991年になって補填によって解決したのです。「根拠をもって明示して国益を守ったことは正当である」と、D.モロムジャムツ、J.バトムンフら、またソ連邦よりわが国に駐在しているS.パヴロフ大使が支持してくれたため、私たちはより勇敢に意見を言うようになりました。ツェデンバル氏に伝えると、「それは正しい」と言っていました。

しかしながら、議定書が発効し、私たちの提案を正当に扱い、問題を前向きに解決しようとしていた矢先、A.I.フィラトワとD.マイダルが政治問題として蒸し返したのです。モンゴル・ソ連関係の利益を、具体的にはエルデネトの合弁工場の利益を否定する

「エコノミスト集団」がモンゴルに誕生したことになりました。反ソ連親中国派とはD.モロムジャムツ、P.ジャスライ、N.ミシグドルジ、D.ドルゴルマー、D.ソドノムらで、これらを早急に「更迭する必要あり」という提案をY.ツェデンバル氏に示したのです。

モンゴル・ソ連の協力の恩恵を否定するこれらの人物の更迭、追放に関する決定案をD.マイダル氏の指示でバルバルという人物が起案し、1984年春、Y.ツェデンバル氏に渡しました。この決定案の草稿は現在モンゴル人民革命党の文書館にあります。更迭対象者の中にモンゴル人民革命党中央委員会政治局員、閣僚会議議長J.バトムフ氏も含まれていたのですよ。Y.ツェデンバル氏は彼ら2人の案を受け入れ、更迭準備を進めるべくモンゴル人民革命党中央委員会の「人事課」へ指示しました。こうして1984年7月末、自身はソ連へ休暇のため出かけました。モンゴル人民革命党中央委員会「人事課」の責任者だったラムジャブ氏はこれほど大勢のエコノミストを一斉に更迭する必要があるならば、理由をよく審議した上で決定を下す必要があると考え、Y.ツェデンバル氏に伝え、この問題を休暇から戻ってから審議する許可を取りつけたのです。このことを私はのちにラムジャブ氏から聞きました。このような問題が起きていることを私たちが当時どうして知ることができますか。モンゴルの国家指導者間の対立はソ連共産党中央委員会の知るところとなり、この問題を紛糾させ、モンゴル・ソ連経済関係の恩恵を理由にモンゴル人民革命党やモンゴル国家指導部にいるエコノミストを更迭、追放するような事態に至らしめてはならないとソ連側は判断しました。

これらのことから、Y.ツェデンバル氏を国家指導者の要職から解任する必要が生じたこと、A.I.フィラトワとD.マイダルが個人的な利益のため決定を早めたことが明らかとなるわけです。

私は1984年8月のはじめ、休暇のために出かけたソチでおよそ1週間を過ごしたころ、ウランバートルに至急戻れという電報を受け取りました。モスクワに着くとグルバダム大使が出迎え、急な召還の理由を尋ねると、モンゴル人民革命党中央委員会の総会が開催されることになり、そこでY.ツェデンバル氏の解任問題について審議するだろうという簡潔な情報をくれたのです。詳細を知らぬまま、ウランバートルに戻った翌日、党中央委員会に行くと、Y.ツェデンバル氏を全公職から解任する問題が大会で審議される、理由は彼の健康状態の悪化であるとのことでした。当時、私は閣僚会議副議長で、国家計画委員会委員長でしたが、党中央委員会の政治局員ではなかったため、政治や人事の問題には疎かったのです。

モンゴル人民革命党中央委員会の1984年8月総会でツェデンバル氏を解任し、J.バトムフ氏がモンゴル人民革命党中央委員会書記長およびモンゴル人民共和国人民大会議幹部会議長に任命され、閣僚会議議長職は留任となりました。それから4ヶ月後、つまり1984年12月に開催された党中央委員会総会と人民大会議の会議で、私を閣僚会議

議長および党中央委員会政治局員に任命したのです。

ツェデンバル氏の末子Ts.ゾリグはその著書で、父親はまったく健康で、職務をまっとうする能力があったにもかかわらず、ソ連とモンゴルの一部の人たちの陰謀により肅清されたと書いており、モンゴル側の陰謀を企てた疑惑の人物に関する記述の中に私の名前が入っています。この息子は、エルデネトの問題でモンゴルのエコノミストらが示した提案が妥当であると前向きな解決がされたことや、この問題を歪曲して反ソ派であると多くの人間を肅清しようとしたA.I.フィラトワやD.マイダルの企みが実現しなかったことを知りませんでした。耳に入っても、ことの経緯や事情を理解しませんでした。そして私が政治局員に任命されたのは1984年12月であることも知らなかったでしょう。

いずれにせよ、誰かのことを書くならば、真実のみを追究すべきで、書かれている人間が読めば疑念ではなく真実を評価するということを考えて書くべきです。

地位を欲しがる人たち、疑い怪しむ人たち、褒賞を欲しがっては不平不満や憎しみを募らせた人たち、自分のことだけを考える人たちはいるものですが、その言動は、国や社会、人びとの団結、協力者、伴侶にとっても益とはならず、害になるでしょう。

モンゴルの国家指導者を何十年にもわたり務めたユムジャーギーン・ツェデンバル氏を1984年にすべての公職から解任して以来、何年間も良きにつけ悪きにつけいろいろな話が聞こえていました。彼の仕事や生活、功労や失策を現実的に総括し、歴史に残すべきです。

1990年に先立つ約70年間の歴史を、モンゴル国発展の可能性を逸した数十年と考える人びとがいます。また、1990年以降の十数年間をモンゴルが発展の可能性を活用できた年月だとは考えない人も多くいます。困難や過ちから生じた焦燥感や、あるいは急速な発展を願う焦燥感を和らげ、現実在即して評価して考えるべきだと気づくようになってきています。

モンゴル国は、1921年の人民革命によってモンゴル民族を復活させ、人口を4倍に増やし、健康で教養ある人民の国となり、独立を承認されて140か国以上と外交関係を樹立し、国連の活動的な加盟国の1つとなりました。今は民主主義の市場経済国家になりつつあるチンギス・ハーンのモンゴル国を世界中が知っています。モンゴルが将来発展する国であることに疑問を抱く人はいません。

Y.ツェデンバルは40年以上モンゴルの国家指導者の地位にいました。彼が国家指導者であった期間、国がより発展する可能性は活用されず、モンゴル人の希望に十分応えられなかったと評価する人もいます。歴史においてある人の任務が大きくても、その人のみの能力によって国や人民の運命が決定されたはずだという愚かなこだわりを持ってはいけません。われわれモンゴル人はみな、社会主義国家を建設しよう、われわれの未来は社会主義にあると心の底から信じていました。Y.ツェデンバルもそのような未来を信じていました。信念のもとに生きたがゆえにその人を非難したり、邪険にしたりす

ることが私たちモンゴル人の性格であってほしくありません。前の世紀で社会主義体制以外の世界でモンゴルという国が存在できる条件がなかったことを私たちは認めるべきです。

日本の帝国主義者らが1939年にハルハ河付近でモンゴル軍と武力衝突した際、モンゴルを守る戦いに30歳に満たない若者だったY.ツェデンバルは政治的指導者としてモンゴルの兵士たちを激励し、すべての面での供給の組織、ソ連軍の幹部と密接な協力といった責任ある仕事を前線で自ら遂行していたのですよ。

ファシズム時代のドイツが1941年にソ連を侵攻し、第2次世界大戦を引き起こした際、ソ連人民や軍へのモンゴル人民からの支援を卓越した手腕で組織したモンゴルの指導者の1人がY.ツェデンバルでした。あの戦争でモンゴル人がロシア人民側に立ち、小さいながらもすべての可能性を動員して支援したことは、モンゴル国、モンゴル人民の命運のために反ファシズム戦に積極的に加わり、貢献すべきであることを深く意識し理解していたことの表れです。モンゴル人民の支援物資をソ連兵のために現場へ届けていた人びとの1人がツェデンバル氏です。

ソ連の伝説的英雄であるG.K. ジューコフやそのほか有名な司令官らとY.ツェデンバルは1939年から協力して尽力し、親睦を深めました。ソ連軍の多くの司令官とツェデンバル氏のあいだに長年築かれた友情は、モンゴルとロシア、両人民、軍事面での長年の友好関係、信頼、総合的協力の拠り所となっていました。

ソ連の国家、軍事功労者らとツェデンバル氏とのいくつかの会見に同席し、親密な会話を聞く機会が私にはありました。ハルハ河戦争と第2次世界大戦の時代、共に尽力していた非常に多くの人びとをフルネームで記憶し、その功労や尽力を思い出して語るのを聞き、会った人を忘れないこと、彼らに敬意を払う人間らしいすばらしい人柄を人びとは本当に尊敬し、評価していました。Y.ツェデンバルを戦争史や軍事学をよく研究した広い知見を持った人物であるとロシアの著名な司令官らは評価し、尊敬していました。「敵の戦力を総力戦にもちこんで勝利した歴史は、世界戦争の歴史において1939年のハルハ河戦争で初めて再現された！」と語られていたものです。

モンゴル独立問題で、1940年代にモンゴル全人民による国民投票を行い、1人ひとりに意思表示をさせて結果をまとめ、海外に知らせる作業を成功裏に組織した功労者の1人がY.ツェデンバルです。モンゴルはY.ツェデンバルの時代にこそ国連に加盟し、独立を承認してもらうことができたのです。

モンゴルの人口は1950年まで年平均0.4~0.8%の増加率でしたが、1950年代半ばから人口の自然増加率が年間2.5~3.0%に伸びたのは、多方面からの保健施策が効を奏したことを明白に表しています。わが国は1950年の人口はたったの77万2000人でしたが、1990年に215万人になり、2.8倍に増加しました。

モンゴル国では1940年に8歳以上の国民の識字率はわずか21%ほどでした。当時は

Y. ツェデンバル氏のキャリアがようやく始まった時代です。そしてツェデンバル氏が非常に精力的に活動していた時代、すなわち1965年ころは、就学年齢にあるすべての青少年を8年制、つまり準中等教育を受けさせる目標を掲げる条件が整い、1980年代にはその目標は完全に達成されました。国内外の大学、テクニコム（中等専門学校）、技術専門学校で1980年代からモンゴル人の専門家、専門職員を十分な人数、育成できるようになったのですよ。

Y. ツェデンバル自身はロシア語をたいへん良く習得した人で、ロシア語教育は、専門的人材となるための重要な条件であると考えていました。その信念に従い、ロシア語をよく学ぶようことあるごとに奨励、要求していました。ロシア語の語学力を人材の選考や配置の際に考慮していた経験をあしざまに言ったり揶揄したりするのではなく、これを参考に外国語を中途半端にはなく良く知っているかどうかを試験し、評価することは正しいことだと思われます。彼をモンゴルの経験豊かな国家功労者であると社会主義諸国の指導者らは評価し、尊敬していました。

社会主義諸国は、その経済的な潜在の可能性を拡大させていた1970年代からモンゴルに対して強力な援助を開始しました。外国の借款を具体的な目的で活用するための重要な条件は、国家長期発展計画をもち、計画した大規模なプロジェクトは別個に行うフィージビリティスタディによって利益が確実に明らかにされているべきであると考えられていました。このような要求が最重要となっていることについて、ツェデンバル氏は1969年、私を財務大臣から解任し、国家経済委員会副委員長に任命する際に語っていました。「委員会の日々の業務を自分が中心となって担当し、長期発展計画作成および発展を決定づける重要なプロジェクトのフィージビリティスタディを君が中心となって担当するのはどうだね？」という国家計画委員会委員長だったツェレン・ベルジェー氏の言に従い、私は国家計画委員会の業務を組織しました。

モンゴルの工業力を発展、定着させる10～15年の方針を数字を根拠に策定し、社会主義諸国の経済学術機関と関係を結んで協働する、長期計画および5ヶ年計画を他国と連携して調整する等の広範な活動が盛んになっていたのをツェデンバル氏は支持し、一部の問題解決には助言や指示を与えていたものです。

1970年代中ごろ、モンゴルの工業力を1990年までに発展させる最初の総合方針が策定されたことを重要とみなし、この計画をモンゴル人民革命党中央委員会政治局で審議しました。ソ連国家計画委員会付属の工業力調査評議会、通称ソップス（SOPS）という経済研究所の所長を筆頭に20名以上の学者が参加したモンゴル人民革命党中央委員会政治局会議をツェデンバル氏が自ら主導し、モンゴルの将来の発展問題を全方面から関連づけて策定した最初の計画を高く評価しました。この重要な作業を継続し、2000年までの発展計画に盛り込むべき問題、とくに科学、先端技術の活用に関する彼の意見、指針は文書として残されています。指導者というのは、国家の実態を手のひらに乗

せて見るように評価し、将来を幾通りものパターンで想定し、職務を遂行できるのだという例を示しているのだなあという印象が生まれていました。当時、ツェデンバル氏は本当に頭脳、能力、実務において模範たりうる人物だったのですよ。

上述した作業の結果、わが国の経済や、社会の発展を推進する強力な大型プロジェクトが1976～1980年にかけて実施されました。この間、エルデネトの銅コンビナートや天然資源の活用で輸出力を上げるたくさんの工場が操業開始し、フル稼動するようになりました。燃料エネルギーの大規模な供給源もできました。畜産原料を完全加工するようになりました。農産物の生産量も一定し、穀物、ジャガイモ、野菜を完全自給できるようになりました。この時期、集合住宅が、地域ごとに総合的サービス施設、学校、幼稚園、病院とセットで都市、地方ともに建設されました。ほぼすべての国営農場を整備しました。全県を中心に、現代の要求を満たす大規模複合型の学校または病院を建設したほか、地方をラジオ中継施設で結び、県中心ではテレビ視聴が可能となり、通信事情が改善されました。大事業の15年だったと根拠を持って言えます。

1983年、フブスグルのリン鉱床の利用にモンゴル側が関心を示しているという公式見解を示すようにという政府間委員会ソ連側高官からの要請が私宛てに届きました。私はこの鉱床の利用は高い経済的収益性がある場合にのみモンゴル側は承認する、という回答電報を起案し、ツェデンバル書記長に見せました。彼はその電報文を見て、君の意見は正しい、このように回答すべきだと言い、ロシア語で起案した回答電報文を注意深く読み、1語、修正してくれました。国家計画委員会の公文書を見ればこの電報があります。

国益のために働いていた人は誰でも、正しい仕事のために、ツェデンバル氏から叱責ではなく支援を受けていました。

Y.ツェデンバルは教養があり、人びととともに賢明に注意深く付き合う人でしたが、それが尊敬を集め、模範となっていたことを多くの人が知っています。自分の例で証明します。

1970年代、私がツェデンバル氏に作業報告を行う際、偶然試されていたことが1度あったのです。経済相互援助会議（コメコン）の関係で1970年初期から大規模な事業が展開していました。コメコン加盟国との関係の発展にかかる総合計画が承認され、その実施作業は、すべての関係機関、中でも計画経済機関によって組織されていました。

ツェデンバル書記長は休暇中でも休むことなく仕事をする人で、家に呼ばれて作業報告をすることも多々ありました。1度、作業報告に呼ばれ、報告が終わったあと、ツェデンバル氏はうしろの机から1冊の本を取り出しました。それは経済相互援助会議の企画分野協力委員会の定例会議の議事録でした。分厚い議事録のすべてを熟読したのでしょうか、たくさんのページに紙がはさんであり、赤や青の鉛筆で印がつけてあるのが見えました。

「君が参加しているこの委員会の会議議事録を読んだが、質問がある」と、議題ごとにこれはどういう理由なのか、これはなぜなのかとたくさん質問をしましたが、30分ほど話し合った末、「よしわかった。多くの重要な問題を審議し、おもしろい決定がなされたのだな」と言って議事録を私にくれました。

ツェデンバル氏はその資料を読んで、確認したいことがあったのでしょうか。しかし実のところは私が参加している会議の議事、決定、それらの経緯をよく把握しているかどうかをまとめて試していたのであって、これは私にとって大きな教訓となりました。勤勉で教養ある長の指導のもとで努力した人は仕事の中で学ぶものなのでしょう。

7 ツェデンバル氏の過ち

D S : Y. ツェデンバルには、40年以上にわたるモンゴルの国家指導者であった期間中、いくつか失策もあったでしょう。10本の指の長さが等しい人はいない、つまり完璧な人がいないというのは本当なのです。ツェデンバルのもっとも惜むべき失策は、西部国境問題に関する決定だろうと思います。モンゴル人民共和国とソビエト連邦の国境線を1957年に画定する際、オブス県北部の国境線の画定で論争が生まれました。外務大臣であったアウルゼド氏は、モンゴル代表団を率いた交渉の場で、かなり北側に国境線を定める案に固執していたのです。彼は政府の指示に従っただけなのだと思いますが。

協議の過程や結果を知っている一部の人は、たとえば生涯をモンゴル国境問題と関わった大将ツェデン・イシ氏に当時いったい何が起きていたのかと尋ねました。双方の意見が決裂し、何度も協議したにもかかわらず合意に至ることができず、膠着状態に陥りました。それでソ連側代表団の1人で、ある年配の人が、このように意見が割れている場合は、双方が主張している国境線の間を国境と定めて合意すればよいと提案し、それを受けて合意するのが妥当でした。しかし、アウルゼド大臣はあくまで自分側の案に固執しました。それは駐モンゴルソ連特命全権大使V.モロトフが国境画定交渉に干渉する好機となりました。V.モロトフが直接Y.ツェデンバルに対して圧力をかけ、強硬に要求したことでアウルゼド大使は更迭され、ソ連側主張案による国境線が画定されたと語られているのです。「その交渉に私は直接関わっていない」とツェデン・イシ氏は語っていました。

北部国境問題がどれほど公正に解決されたのか、詳しい経緯を私は知ることはできませんでした。交渉がいったいどのように行われたのかをよく知る人びとはいます。いずれにしても、モンゴル人が大昔から暮らし、所有してきた一部の土地や、利用してきたダウストという名の、岩塩を豊富に埋蔵する山を失う、その交渉条件を承諾するしかほかに方法がなかったことに疑念を抱いています。アウルゼド大臣は、双方の折衷案に沿って柔軟に交渉を進めることができなくなったのでしょうか。彼を一貫して守らず、海

千山千のモロトフの圧力に屈して肅清したのではないかという疑念が生まれるのを隠せません。

私のある友人は、オブス県のダウスト山を擁するダウスト郡出身のドゥルベド族ですが、私たちは自分の生まれ故郷について話をします。年老いた友は、自分の先祖、そして自分自身の生まれた場所や、羊を追いながら育った故郷が国境の向こう側に行ってしまったので、今はいなかの生まれ故郷を訪れることができなくなって双眼鏡で見ただけになってしまったよと言い、細い目に涙をためているのを見ると残念に思います。

はるか40年も昔に論争になったことですが、圧力によって承認に至り、定められたであろうモンゴルとロシアの国境線を調査する名目の作業が長年続けられ、この2002年に何冊もの地図や文書によって承認されているのですよ。モンゴル側からは国境やその歴史的経緯をよく知り、国境線を調査して正しく画定する作業を担当、遂行可能な人びとが参加、指揮したのでしょう。

しかし、わが国の国家指導者たちは1961年に南側の大国、中華人民共和国との交渉では、モンゴル・中国間の何千キロメートルにわたる国境線を公正に画定する問題を短期間で成功裏に解決したのです。国際的な、そして両国関係の時代の状況や時期を的確に選択した賢明な先人の行為の成果として、モンゴル・中国国境交渉は成功したのです。これにY.ツェデンバル氏は大きな役割を果たしました。現在、モンゴルは2つの隣国と何百年もの経験によって協議して画定された国境で隔てられ、友好的に交流し、独立、安全を保障されているというわけです。

Y.ツェデンバルは多くの人びとを肅清したと言う人がいます。私は初めてモンゴル人民革命党中央委員会の総会に1964年に出席し、政治闘争に直面しました。その総会や、翌年の総会で一部の人間はモンゴルの発展は遅々として進まない、これはY.ツェデンバルの政策、中でも誤った対外政策のためだと厳しく批判していました。彼らはツェデンバルの地位を変えるのが目的で、今の言い方をすれば権力闘争をしていたように思われます。一部はツェデンバルを解任し、代わりに自分が表舞台に出ることを目論み、当時のソ連指導者の支援を希望し、待っているのを私は確かに聞いていました。

モンゴル人民革命党中央委員会のその総会で、中央委員会メンバーの大部分はツェデンバル派でしたが、彼らの支持は日和見的なものではなく信念に基づいたものでしたし、はっきりと感じられるものだったので、闘争を仕掛けた者は非難され、しかるべき処分を受けたことは確かです。私たちも当時は批判を受けていたのです。

モンゴル人民革命党中央委員会の1964年、1965年の総会で、Ts.ローホーズ、B.ニャムポー、B.ソルマージャブそしてL.ツェンドらの問題を審議し、激しい批判合戦になりましたが、私は初めてこのような大会に出席していて、何の経験もなかったので見守るしかありませんでした。

今では多くの政党が分裂し、国権掌握や地位獲得のため、ある者は嘘の口約束や誹謗

中傷などで厚顔無恥な闘いをし、対立する党や勢力、人びとの名誉を傷つけています。選挙に勝利した側が、対立する党に所属する人びとの仕事や生活の場を奪っているのと並べて考えてみると、モンゴル人民革命党中央委員会の1964年、1965年総会での決定に驚くことはありません。当時非難されていた人びとを現在まるで国民的英雄のように語ることの意義は小さいように思われます。当時の時点で、一党独裁制を変え、現在のような形で民主主義を發展させ、市場經濟化することについて語り、闘争していたと言えばまったく嘘になります。政治は汚れた玩具だというのが真実なら、その真実は過去にもありました。現代はもっと汚れた玩具になっているでしょう。しかし、非難された人たちの家族、兄弟姉妹、親戚縁者、知人友人といった大勢の罪なき人びとの仕事や生活を損なわせていたことを決して正当化してはいけません。このような過ちをただ批判するに終わらせず、何らかの形で現代に繰り返させないことが重要なのです。

20世紀の約70年間、世界各国は社会主義と資本主義という2つの陣営に分かれ、イデオロギーの両極で競争、闘争していました。この大きな競争や闘争の外にとどまり、いずれかの大国の影響を受けずにいられた国家はなかったでしょう。モンゴルの場合、冷戦時代には社会主義と呼ばれた体制下に入る以外ありませんでした。そのため、モンゴルがソ連の従属国であったのは歴史的に不可避な状況であったと見ることは正しく、モンゴルの指導者、中でもツェデンバルを非難しようと試みることは無意味であると思われれます。

各時代の歴史的条件下において、小国の場合、親密で頼りになるパートナー国を正しく選択するにあたり、賢明に対処する必要があったのですが、このことにおいてツェデンバルの政策は正しく的確でした。たとえば、当時、ソ連ともっとも親密な関係であったためモンゴル国は過ちを犯さなかった、むしろ勝利したと考えています。社会主義体制が崩壊して冷戦が終結し、世界各国と対等な関係を持つ機会が整った現代の発想で、当時の状況に対して考慮せずに1990年以前の何十年もの歴史に評価を下そうとすれば非難されるでしょう。

現代のモンゴルは2つの大きな隣国と対等に交流し、友好関係や双方に有益な協力を發展させる新たな好ましい条件や機会が備わり、このような政策は成功裏に実施されています。1960年代のはじめ、ソ連と中国は社会主義国家でありながら、双方のイデオロギーは相容れず、関係は悪かったのですが、当時の中国の一部の指導者はモンゴル人民共和国は中国の一部であるべきで、独立国家として承認しないという見解を世界に喧伝し、モンゴルの国土を中国領にした地図を教科書に載せていた時代がありました。

Y. ツェデンバル氏は1984年までモンゴルの国家指導者を務めていた間、社会主義路線でモンゴルを發展させることが可能であるというイデオロギーを変わず固く信じていました。彼は集権的計画体制を重視していました。国有財産という財産の一形態が優位であるのが相応しいという考えのもと、私有財産を、中でも「牧民の個人所有する家

畜」を制限すべしという考えに固執していました。彼は人民の生活に悪影響を及ぼすと考え、価格の改定や値上げ、自由化といったあらゆる提案を承認せず、これらを非常に警戒していたのです。彼は政党においては、一党制が正しく、モンゴル人民革命党が指導の主力であるという考えを墨守していました。これらはすべて真実で、今とは正反対の指針によってこれら問題を対処していました。

もしY.ツェデンバルが1980年代の後半、1990年代の初めにモンゴルの国家指導者の地位にあり、ソ連で起きたペレストロイカの時代に現役であったなら、当然、他にならって思想の修正を行ったでしょう。活動し、生活していたあの当時、国家のためという思想を信じ、誠実に活動していたのですから、彼を見下すようなことはいけません。

モンゴル人は時に、人として信じられないようなことをします。モンゴル人民革命党中央委員会の1984年総会におけるY.ツェデンバルの功労を賞賛した報告と1989年総会のY.ツェデンバルを酷評した報告の2つを並べて読むと、どちらをも承認していた私は何という人間であろうかと自問したくなります。時間の流れで物事は変化します。人間の思想も変化します。ただひとつ、人としての良心を失わず、わが身可愛さに他人を犠牲にしない心が欠けているのでしょうか。理由を他からではなく己に見つけよという言葉があることを常に考えて生きてゆきたいものです。

Y.ツェデンバル氏は晩年を祖国から離れたモスクワで過ごし、そこで生涯を終えました。彼は自らモンゴルの空を仰ぎ、空気を吸い、水を飲み、自然を堪能し、モンゴルの同胞たちと一緒にいたいと考え、望んでいただろうと思うと本当に気の毒です。何十年も国家指導者として君臨した彼が、重責を担う職務をまっとうできなくなった時、いくら敬愛すべき人物であるとはいえども、国益の観点から解任という決定を下したことはまったく正しかったのです。

しかし、Y.ツェデンバルの執務能力の衰えを大衆は知らず、今のように指導者たちに関する報道がなされなかったため、知る手立てがありませんでした。そして逆に、ツェデンバルはまったくの健康体で、すべての役職に就いているべきだが、一部の人間たちが共謀して職務から追放したのだというデマをある人が流していたのです。このような状況であったため、1984年8月から一定の期間、ツェデンバル氏がモンゴルへ戻って来ることに用心していたことは事実です。

もし、ツェデンバル氏が健康で、とくに彼の取り巻き、すなわちA.I.フィラトワ夫人の影響下に完全に入らなければ、要職からの解任や、その後の問題の解決は容易で、用心するようことは少なかったと思われれます。Y.ツェデンバル氏が自ら「私の後任にJ.バトムフを任命するのが妥当である」と書いたメモをA.I.フィラトワ夫人が横から奪い取って破り捨てていたのです。A.I.フィラトワに隠れて再度書いてもらったメモは今、モンゴル人民革命党の文書館に保管されています。

Y.ツェデンバル氏一家は、モスクワ市中心に瀟洒なアパートを持ち、夫人や子ども

たちはみなソ連国籍で、2人の息子はかの地で仕事をしていたのですが、1985年にツェデンバル氏の個人預金をすべて移してしまいました。これはツェデンバル氏が家族全員とモスクワ市で暮らす考えで、その条件が整ったことを示すものでした。モンゴルへ一時帰国する機会があり、その機会を利用していました。ですから、ツェデンバル氏を故意に外国に追いやっていたと誤解してはいけません。

夫人や子どもたちがモンゴル国民でいたことは1度たりともありません。わが国の法律で、モンゴル国民の二重国籍は認められていませんでした。現在もそうです。ただし、ツェデンバル氏と共に海外を訪問する際に利用するために、妻子に対してモンゴルの外交パスポートが交付されていたはずです。

8 民主化の胎動

K Y：1990年にモンゴルで民主化運動が始まりました。若い民主化運動家たちはスフバートル広場でハンガーストライキを宣言し、モンゴル人民革命党中央委員会政治局員の解任を要求しました。当時起きた出来事についてお話しただけませんか？

D S：モンゴルは、政治、経済の古いシステムをいかに改革、刷新するか、たとえば、漸進的方法と急進的方法のどちらを選択するかを1989年から迫られるようになったのです。旧社会主義国で高まっていた急激な変革の影響がわが国にも及んできていたのです。

モンゴル人民革命党中央委員会定期総会が1989年12月に開催され、政治、経済システムの改革、刷新強化について審議しました。党中央委員会書記長J.バトムフ氏が演説を行い、審議に入りました。私は経済システムを改革し、市場経済化することに関する私見を総会で発表しました。

モンゴル人民革命党中央委員会のその総会で、モンゴル人民共和国閣僚会議議長の立場から行ったスピーチですが、主旨は次のようなものです。

— 経済システムの改革、刷新作業の範囲は十分でなく、掲げた目標に達する明確な方策を定めて実施する作業が遅れている。どのような方法で経済システムの改革を強化し、促進するかについて論理的に協議、決定する責任が課される時代になっている。

— 理論と実践に関して明確な方向性や共通理解を持ち、統一的な活動を維持し、作業を強化すべきである。経済という枠内で何よりも2つの根本的問題を解決する必要がある。1点目は、財産を所有する形態を多様化させ、財産の取引を改善すること。2点目は、社会構成員の有益な労働を発展させる経済の新しいメカニズムや新しい条件を創出すること。これらの問題が解決されることによって、積極的で成果ある労働が発展し、社会と集団と個人の利益が正しく組み合わされて相互に近づくうえで常に役立つような取引システムが成立する。

— 財産の所有や取引の歪みを是正し、これまで規範としてきた思想や理論、これまで用いてきた実践を改革する。財産の多様な所有形態と同様に条件を整えて、国家財産もまた競争へと投じて厳しい統制から解放すべきである。

— 労働者の社会経済的関心や積極性、経営者意識の発展に影響しうる、財産所有のあらゆる形態を支持し、発展する方向で指導すべきである。

— 国有、互助組合、民間、個人といった財産所有形態に関し、また財産所有の移動や転換、平等な供給原則などの問題を法制化する必要がある。これらの中から明確な決定を早急に下すべき問題は財産所有の問題である。

— 小規模経営には特有の長所がある。小規模経営の振興には、互助組合や個人による所有がより適している。生産手段を国民が個人的に、家族で所有して、小規模な製造や経営を行うことを支援すべきである。他人の労働を搾取せず、利益の蓄積から適宜、国庫に納めるという条件で財産の私有化を進展させるのが妥当である。

— 財産所有に関する特別な法律を近々策定し、大衆のあいだで議論した上で制定するよう計画している。さらに外国資本の投下や保護に関する特別法の制定も妥当であると考える。

— 新たな経済メカニズムを確立する作業は現在、初期段階にある。この段階におけるわれわれの作業は、集権型計画経済を市場経済メカニズムと組み合わせる手法を探索することに向けられている。市場経済と集権型計画経済とを対極に据える必要はない。国家や人民の需要を満たし、国家の備蓄を確保し、市場の均衡保持に必要な基本的事項のバランスを国家が掌握する以外に方法はない。投資、税制に関する総合政策や、金融の動きなどを国が集中的に調整する必要がある。企業の生産活動を法規に従い調整する役割を国が回避してはいけない。しかしながら、独立した活動の支持という要求に従い、計画手法を改革するという理に適った要求が課されているのは正当である。

— 市場システムを導入し、そこに生産者と消費者が直接取引する条件を成立させる案を私は正当だと考える。何より、農畜産物市場を創出するという課題を解決するべきである。初期には物資供給のバランスが失われ、必需品が高値で供給されるといった困難が発生することを理解し、その困難を克服する以外ない。国の指示、厳しい統制、分配、固定価格システムを温存しているかぎり、市場を作るという目標は実現しない。市場を漸進的に拡大してゆくのである。生産資材、金融市場にとどまらず、情報、科学技術、労働力市場が出現する時、われわれは即時対応できるようにでなければならない。国が市場を効率的に組織し、発展させることが肝要である。

— 多様な財産所有形態や市場の振興にあたり価格設定の改善は非常に重要である。慣例であった誤った水準や比率による価格を、国民の実収入を下げることなく改定する早急な決定を私は支持している。固定価格、上下限が設定された価格、自由価格を用い、徐々に自由価格システムに移行する試みは珍しい。市場メカニズムを価格の無根拠な引

き上げ手段にしないために、競争を發展させ、生産者優位状態の払拭を共に組織しよう。このことと関連し、一部の大規模な工場や企業を複数の小規模企業へ転換する可能性を考えよう。小規模企業の振興施策の迅速な実施をはかりたい。

— 労働や生産の割合に応じて消費すべきであることをわれわれ全員が知り、生活できる経営メカニズムが機能する必要がある。

— 牧民や農家が企業と契約し、賃貸による固定資産の使用を開始した短期間に、經理の普及、労働生産性、備蓄物の供出、儉約志向がかつてない規模で高まっている。具体的な成果が現れているのである。そのため、全ての生産分野で、契約・賃貸のより洗練された手法とその基準、価格設定などを策定、普及する作業に時期を逸することなく着手する必要がある。このような契約を可能なかぎり長期間締結し、安定的に遵守することが重要である。

— 国家の資本投下により整備された固定資産に関する負担金の割り当てや、収益水準の事業税による調整、さらに同時に、多種多様な税と負担金を見直して、所得・利益に課税する簡素で総合的な税制を構築すべきである。あらゆる税と負担金について額や割合を長期にわたって変更せずに実施できるよう法制化する必要があると考え、この方向で立案を進めている。利益配分の方法はいずれにも応用すべきであると考えている。国民の所得税制改正法案は1990年上半期に審議し、承認されることになる。

上のような話の結びに、私は原則を巡って紛糾していたある問題に関する自分の考えを直接、はっきりと述べたのです。

「一部の人間が報道機関を通じ、計画経済の運営手法を今すぐ放棄し、市場経済メカニズムに直ちに移行しよう、全ての価格を規制なしに自由化しよう、といった意見を述べていることに、私は今のところ合意できないと断言する。このような手法で経済改革を行えば、社会、政治が不安定な状態に陥るのがその理由である。トゥグルグの価値が暴落し、国民の生活に直接波及する。生産者は単に価格の高騰によって利益を得始め、多数の工場や企業が倒産し、国中で企業取引が失われる。このような危険を孕んでいるため、一極集中的に計画経済のメカニズムを突然捨てさり、政策や調整なしに市場経済へ突然傾けばどうなるか注意する必要がある。経済、社会、政治が解決すべき問題はたくさんある。それには時間が必要である。突然実現し、突然に成果が現れる魔法のようなものではない。手順を踏むことで獲得した多面的な手法や明確で理に適った活動を基盤として一步一步秩序を見出し、確固たる成果に到達する作業なのである」。

その総会での私の演説はこのような内容でした。このあと事態は急速に展開しました。まもなく1990年3月にモンゴル人民革命党中央委員会総会が開催されました。この総会で、党執行部の人間たちは、誰が誰であったかをよく理解し、誰と付き合うべきか、付き合うべきでないか、それぞれが結論を出したように思われました。モンゴル人民革命党中央委員会の1990年3月総会では、

— 現状とその評価

— モンゴル人民革命党特別大会の開催について

— 党組織問題

といった議題について審議しました。

政治、経済体制の改革方針が完全に明確ではなく、進捗が遅いことは事実であると総会は認めました。この総会で行われた対外債務問題に関する審議は今も忘れられません。過去70年間、ソ連から大規模な借款を受けてモンゴルを負債国にした張本人を特定するという意見が上がってきました。

すると、子どものころから共に学び信頼してきたある友が、モンゴルを大規模な対外債務国にした張本人はD.ソドノムだ、自分は彼とは無関係だというようなことを言うのです。そのあとすぐ「君がモンゴル国家計画委員会にいた時、そして閣僚会議に移ったのち、それぞれいくらの外国借款を取りつけたのか？」と書かれた質問状が私のところに届きました。私は審議の休憩時間に準備し、その質問に次のように回答しました。

「私は国家計画委員会の副委員長、委員長職を1969年から、閣僚会議議長を1984年から務めた。モンゴルは1970年から1985年に50億、1985年から1990年に35億の振替ルーブルによる借款をソ連邦から受け活用した。これらすべての援助借款はわが国の経済力強化と社会問題解決に捧げられた。このような援助借款によって1975年から1989年のあいだにあらわれた変革や実績を簡単に列挙すると次のようになる。

— 石炭の採鉱能力が320万トンから820万トンになった。

— 各発電所の合計発電能力は266メガワットから890メガワットに増加した。

— この間にエルデネトおよびモンゴルロスツベトメト合弁コンビナートが建設され、わが国の輸出源を急激に増やした。

— 都市部に乳を供給する機械化酪農場の乳生産量が1,000万リットルから4,200万リットルとなった。

— 穀物貯蔵施設の貯蔵能力が20万トンから40万9,000トンになった。

— 灌漑設備を備えた耕地の面積が7,000ヘクタールから3万5,000ヘクタールになった。

— 食品工場の生産力が1.7～2.0倍に増大した。

— セメントを50万トン生産可能な新しい工場が建設された。

— 建築用壁材の生産量が2.5～3.0倍に増えた。そのうち、レンガは8,500万個から2億1,100万個、鉄筋コンクリート製品は7万1,000立方メートルから21万5,000立方メートルとなった。

— 絨毯の生産量は35万平方メートルから243万平方メートル、メリヤス製品の生産量は88万枚から310万枚となった。

— 家畜の皮革を100%加工し完成品の生産が可能となった。

- 援助の恩恵によりほぼ全県の中心部でテレビの視聴が可能となった。
- アパートの延床面積の合計は188万平方メートルから440万平方メートルとなった。
- 一般教育学校および専門技術学校の校舎における座席数が19万4,000席から29万2,000席となり規模拡大した。
- 病院のベッド数が1万4,300床から2万3,400床となった。

これらすべてをモンゴルの全国民が知り、理解している。時間が限られているため、まとまった情報を簡潔に説明する。利用している国民所得の貯蓄に対する消費ファンドの占める割合が小さく、そのために生活が向上しないという批判があるのを私は正しいとは思わない。ソ連はわが国に借款を供与し、われわれが受ける際、消費ファンドではなく、経済の基盤分野強化事業に向ける政策を採ったのは正当であった。しかし、借款の完全な有効活用、計画した施設の短期間で高品質な建設、技術の選択においては不備がある。もし、この約15年という短期間にこのように大規模な援助借款を受け、上述のような実績が出せなければ、われわれの生活は1960年代の水準か、あるいはそれより厳しい状況になるだろうと十分に考えられる。債務国にした張本人を特定し、罰する必要が生じているなら、その犠牲になる人間の1人は私であろう。このような借款を受け、実現すべき課題を前向きに解決すべく積極的に活動し、算定根拠を示し、信頼関係の構築、幾度も契約・協定の締結に参画した人間が私である」という回答をしました。

このころ、政治の不安定な状態が日に日に強まり、「改革・刷新が遅い」と党、政府の上層部を批判し、反抗や闘争が激しくなっていました。われわれは、社会生活の調整を図り、正す手綱を失う状況を作り出していたことに気づくべきだったのでしょうか。

9 民主化運動への対応

1990年に日本を訪問し、3月4日に帰国したのですが、3月7日にスフバートル広場でハンガーストライキが宣言され、一部の若者が座り込みをしました。わが国でかつて起きたことのない、平和的闘争のもっとも過激な形、人命を引き換えにした行動に対処する経験がなかったため、党、国家の最高幹部にあったわれわれはみな、狼狽しました。しかし、ハンガーストライキを即刻中止させ、人命を失わせないために考えるすべてを行うということでわれわれの意見は一致しました。

新勢力となる若者のうち8～9名がハンガーストライキを行いました。彼らはモンゴル人民革命党の独裁放棄、人民大会議の解散という2点の要求を掲げていました。3月8日は休日でしたが、私は出勤しており、J.バトムフ書記長はイフテンゲルの公邸で、4日後、つまり13日に行われるモンゴル人民革命党中央委員会総会で行う演説の原稿を起案していました。

このような深刻な状況を見てじっとしてられなくなり、私はJ.バトムフ書記長に電話し、「スフバートル広場へ行き、ハンガーストライキを行っている若者たちと会い、ストライキ中止の話し合いを持ちましょう」と提案しました。J.バトムフ氏は「君が決めなさい」との回答でした。このような回答をもらい、一緒にいた閣僚会議副議長D.ビヤムバスレンに、ハンガーストライキ首謀者との面会を提案している旨をスフバートル広場に行って話してもらうよう頼みました。民主同盟と関係のあったD.ビヤムバスレンは私の提案を承諾し、彼らと面会しました。私の提案に対する回答は「安全確保の調整に応じるのは難しい、一方で大衆に広く知らせることは重要であるので、貴殿とテレビで会見しよう」というものでした。政府庁舎での面会を考えテレビ局の人間に相談すると、機材を政府庁舎に搬入するのはたいへんだし時間もかかるので、会見をテレビ局で行う提案が出されました。こうして16時にテレビ局に行くよう取り決めました。私はD.ビヤムバスレンと一緒に取り決めた時間に行きました。私たちが出発する時、モンゴル人民革命党中央委員会書記、人民大会議幹部会副議長Ts.ナムスライ氏と遭遇し、会見の同席を提案しましたが断られました。人民大会議幹部会副議長であり、党中央委員会書記の立場で、この2つの組織にまつわる問題で根本的な要求が課されていることに注目し、会見や話し合いに参加すれば良いだろうという考えで彼を誘ったというわけです。

ハンガーストライキの代表者が次々にあられ、17時になった時、E.バトオール、B.バーバルとその他若者が会見に参加しました。会見では私が話の口火を切りました。「諸君はモンゴルの政治、経済体制を改革、刷新する方策の選択を、非常に過激な形、つまりハンガーストライキを宣言し、人命を引き換えに要求している。高い責任と反響の大きいこの問題を、秩序よく正しく解決できるか否か、諸君そしてわれわれは、国民に試されているのだ。諸君は2点の基本的要求、すなわちモンゴル人民革命党の権限の制限と人民大会議の解散を求め昨日からハンガーストライキに突入した。このような要求に対し、本日、最終決定を下し、回答する権限を持つ者はいない。党、国家の最高権力機関で審議、決定すべきであることは諸君も承知である。モンゴル人民革命党の特権を制限することに関し、諸君が話題としている問題は4日後に審議すべく準備を進めており、モンゴル人民革命党中央委員会の臨時総会の審議で取り扱うことになっている。モンゴル人民共和国人民大会議の解散要求とその根拠は、12日後に予定されている人民大会議臨時会議で提起されることになる」と発言しました。

しかし、彼らは「モンゴル人民革命党中央委員会政治局員を解任しろ」という新たな要求を提示しているというのです。「党中央委員会の臨時総会で現況に関する討議を行うので、政治局の解任という追加要求も取り上げられることだろう」と回答しました。「すでに諸君の全要求は党、国家の最高機関で審議されることになった。このことを諸君そしてテレビを通じて大衆に通知した。それゆえ、ハンガーストライキの即刻中止を

諸君らに呼びかけたい」と付け加えました。私の呼びかけに彼らは明確な回答をしませんでした。このようにして私たちの会見は終了しました。

テレビ局での会見後、出勤すると、中央委員会や政府のメンバー、J.バトムフ氏以外の指導者らがみな集まり、テレビ会見を見ていました。私は彼らに「テレビ局で行った会見について説明しましょう」と言いました。彼らは「必要ない、われわれはすべてを見、聞いた」と言ったのです。その晩、一部の人びとはスフバートル広場や政府庁舎に通じる主な通りへの警官や軍隊の配置や、外出禁止令の発布を提案しましたが、「J.バトムフ書記長に知らせることなく決定はしない」という回答をしました。

翌日、3月9日の日中、J.バトムフ書記長の執務室でモンゴル人民革命党中央委員会政治局の会議が執り行われ、政治局員全員への解任要求の対処について協議しました。J.バトムフ書記長はモンゴル人民革命党中央委員会政治局の正局長と局長候補1人1人に意見を述べさせました。全員が「総辞職は正当だ」と述べ、総辞職が行われない場合は流血の、そして人命が失われるまで闘争が激化するだろうこと、ハンガーストライキや集会を他の方法で中止させ、事態を沈静化させる方法はなくなったこと、新勢力の改革・刷新を迅速に実行する提案を原則的に誤りとみなす根拠がないことを私たちはみな同様に理解していたのです。

J.バトムフ氏は最後に私の考えを尋ねましたが、私は「政治局の総辞職に異論はありません。総辞職を承認します。しかし、党や政府の手綱を握る責務をどのような人物に移譲するのが適当かを考えることなく放置してはいけません」と述べました。しかし、私はこの件について明確な意見を言うことはできず、言おうと思うものの、練り上げた明確な意見はありませんでした。

こうして3月9日の午後、J.バトムフ氏はテレビで演説し、数日後に行われる党中央委員会の臨時総会で政治局の総辞職問題について審議することになったと発表し、ハンガーストライキを即刻中止し、人命を守ることを呼びかけました。J.バトムフ氏の通知後、夜はずっとテレビで放送した会見が流れ、その結果、ハンガーストライキに参加していた人びとは帰宅し、緊迫した事態は沈静化しました。

J.バトムフ氏の通知後、9日の晩ハンガーストライキは終了し、デモ集会も沈静化したので、比較的平穏な状況だった数日間にモンゴル人民革命党中央委員会の1990年3月13日総会を準備し、実施しました。総会では中央委員会メンバーの70名以上が意見を述べ、政治局員の解任、党中央委員会執行部の更迭、そしてモンゴル人民革命党特別大会の開催が決定されました。その後7日が過ぎ、人民大会議の会議が開かれ、人民大会議幹部会議長職からJ.バトムフを、閣僚会議議長職からD.ソドノムを解任する決定がなされました。

J.バトムフ氏と私はこれら役職からの解任問題の提起を計画し、話し合っていました。ある人は私たちが留任するのではないかと無駄な心配をして口に出してもいまし

た。この会議に出席していた時、閣僚会議議長の解任を希望する旨の会議で演説する原稿を心配する人に見せ、これでいいかと尋ね、安心させていたのですよ。

党中央委員会総会ののち、モンゴル人民革命党中央委員会書記長に任命されたゴムボジャビーン・オチルバトが会いに来て、人民大会議幹部会議長、閣僚会議議長への任命を計画している人物について、私の意見を尋ねました。私は閣僚会議議長にSh.ゴンガードルジを任命するのが妥当と考えていることをゴムボジャビーン・オチルバトに言いました。前日に意見を尋ねに来るかもしれないと思い、D.ビヤムバスレン、Sh.ゴンガードルジの両氏と会い、意見交換していたのです。「もし私の意見を尋ねたならば、ゴンガードルジを閣僚会議議長に任命する案を述べる。理由は、ゴンガードルジが農牧業や農村の生活を熟知しており、同僚らの意見や助言を受け職務遂行できると考えているからである。しかしながら、経済、財政問題については困難なことがあるだろう。D.ビヤムバスレンについては、率直に言えば、他の意見を聞き入れる点で劣ると言われている。それは事実だ。しかし経済、財政に明るい。だから閣僚会議第1副議長への任命案を述べる。君たち2人で協力し、互いに助け合い職務遂行してくれば良いと思う」と言い、2人も「おっしゃる通りです。承認します」と言っていたのです。「人民大会議幹部会議長にはボンサルマーギーン・オチルバトを任命する案がある」とG.オチルバトに言いますと、彼も「同感です」と言いました。人民大会議の会議で、上述した任命案が決議されました。

会議ののち、ゴンガードルジに閣僚会議議長職を引き継ぎました。ゴンガードルジは農牧業問題担当の私の代理でしたし、省庁やそこで管轄する諸問題や仕事の方法を知っており、政府職員や、県、市の指導者とも良く面識があったので、仕事の引継ぎは容易でした。

党、政府の最高幹部職として長年務めた最後に1990年3月末、57歳で辞職し、私は本当に自由な国民になりました。

10 「ツェデンバルの取り巻き」という批判

わが国の新しい歴史において、思想の異なる、そして支配を好まない人びとに対し、1930～1940年代にはあらゆる謀略による罪を着せられ、大勢が闇に葬られていました。当時の状況では、モンゴルの安全と独立にとって脅威となる行為をする人間は少なくなく、彼らと戦う必要があったのです。しかし、極端に広まった疑いや恐れ、誤った厳しい闘争、擾乱者や追従者らの害毒により大勢の罪なき国民が残念ながら粛清されて命を失った歴史があります。

モンゴルの国家を1921年から主導してきたほぼすべての人間が粛清されたのでした。1940～1950年代からは殺害という方法での粛清は止まりましたが、仕事や生活を脅か

す形の肅清は継続していたのです。1990年にモンゴル人民革命党の当時の執行部として新たにあらわれた一部の人びとの提案によって、これまで定期化したとも言える大規模肅清について総括し、教訓とすることになりましたが、これは行き過ぎたことではありません。

1990年6月に人民大会議中央委員会総会が開催され、「Y.ツェデンバルの取り巻き」らの行為に対する政治的総括について審議しました。この2ヶ月前に開催されたモンゴル人民革命党特別大会で組織された特別委員会がこの問題に関する報告案を準備し、総会に提案しました。

報告の主旨は次のようなものです。

— モンゴルには単独の指導者が統治する官僚主義制度があった。それはソ連邦の模倣であったと総括する。

— 歴史におけるツェデンバルの地位を明確にした。Y.ツェデンバルはモンゴルの発展や成功に貢献した。しかしY.ツェデンバルは物質的、精神的な可能性を完全に、理性的に活用せず、言語、歴史、文化、人民の暮らしの知恵、習慣、モンゴルの発想を守るうえで誤った位置づけを行った。モンゴルのソ連邦への統合に注力していた。国境問題の失策は決して赦されるものではない。

— 欠点の払拭、国家發展の意欲を鈍らせ、人を思想のために取り調べて損害を与え、人権を深刻に侵害した。

このように述べ、Y.ツェデンバルには、個人として、社会主義体制の枠内で多様な選択肢の中から、国家、民族、人民の個人的利益により適し、より人道的で理性的な、国民的な方法を選択、活用する可能性があったことは確かであると総括したのです。

「Y.ツェデンバルの取り巻き」とされた人びとは、3つのランクに分類されました。

- a) Y.ツェデンバルともっとも近しく、影響力があり、意思を最優先で実行していた人物。S.ロブサン、N.ロブサンラブダン、D.マイダル、T.ラグチャー、B.デミド、B.ラムジャブ、Ts.ナムスライ。
- b) 雰囲気に合わせて、与えられた任務を能力に応じて遂行し、権利や地位を最優先せず、状況に適応していた人物。J.バトムフ、N.ジャグワラル、D.モロムジャムツ、Ts.ドゥゲルスレン、B.ラムスレン、M.ベルジェー。
- c) 協調者。しかし、ある重要な問題においては、異なる意見思想を持ち、それを敢行、表明していた人物。D.ソドノムら。

「Y.ツェデンバルの取り巻き」は、なぜ、党において誤りであるのか？という問題が提起され、6か条の批判が書かれていました。

— 経済効果を向上させる強力な進歩が見られず、負債が増加し国民の生活水準は長年これといった向上がなかった。

— 集団指導や批判は1964年以降失われ、言論の自由が閉ざされた。

— 人材育成、選考、研修、後任、代替要員の育成がうまく行われなかった。
— 理論の軽視。理論的発想を妨害した。
— Y.ツェデンバルの品行の悪いA.I.フィラトワ夫人を党、国家、集団組織の内部問題、人事問題への干渉に至らしめ、名誉や褒賞を付与していた。
— 自らの決定で相互に名誉や褒賞を与え、特別な便宜供与を図っていた。
演説で取り巻きと名指しされた人びとが個別に総括され、どのような刑罰を与える意向であるかが党中央委員会総会で発表されました。私に関しては次のように総括されました。

「D.ソドノムは閣僚会議副議長および国家計画委員長を10年、閣僚会議議長を6年務め、経済、社会発展の主要な問題の解決にあたり重要な任務を担っていた人物の1人である。D.ソドノムはこの間、モンゴル人民共和国の経済をより速く発展させる可能性を完全に生かし、外国との経済関係の利益を向上させ、経済改革を社会・政治関係と密接に関連づけ総合的に発展させるにあたり、積極的に取り組むことができなかった。D.ソドノムはY.ツェデンバルの協調者で、担当職務においては、国家の経済、社会生活に現れた歪み・欠陥の誤りを共有すべき人物の1人である」と述べられました。

総会は「Y.ツェデンバルの取り巻き」の行状に対して行った政治的総括、作成案を基本的に妥当であるとみなしました。総会決定の第2条には、「党、国家の最高幹部職を長期間務めるにあたり、国家の経済、社会、政治、精神的活動に発生した歪み・欠陥を完全に払拭せずさらに悪化・蓄積させ、自らの地位、行為によりY.ツェデンバルの独裁主義の欠点を維持・深化させ、党や国民からの偉大なる信頼に十分に応えなかったD.ゴムボジャブ、S.ロブサン、D.マイダル、D.モロムジャムツ、T.ラグチャー、1960～1970年代に党統制委員会の業務手法に現れた深刻な欠陥を払拭しなかったのみならず伝承、継続させ、法規や党の規律に違反し、人間の運命を根拠なく損なっていたB.デミド、党の人材政策を歪曲し、Y.ツェデンバルの協調者らを根拠なく損なうことに参画していたことからB.ラムジャブをモンゴル人民革命党から除名する」と記されていました。

総会決定の第3条には、「独裁制の時代にわが国の社会的活動に発生した欠陥に対し日和見的に対処し、党や国民を代表して引き受けた重責を十分に遂行しなかったJ.バトムフ、D.ソドノム、B.アルタンゲレル、S.ロブサンゴムボ、P.ダムディン、G.アディヤーらのモンゴル人民革命党除名を勧告し、戒告する」という条項があります。

モンゴル人民革命党中央委員会の1990年6月総会では、党の処分を受けた党、国家の旧指導者であった上記の人物らを党総会決定第8条にもとづく提案に従い、また証拠資料が揃ったとみなし、同年8月に国家検察庁決定を発令し、刑事事件として審理する作業が開始されました。

D.ソドノムに対しては、刑事事件として次の3つの問題に関して起訴が予定されて

いました。

1. Y. ツェデンバルの個人預金のロシアへの送金を許可した。
2. 定年退職した一部の人間に特別年金枠を設けた。
3. 党、国家幹部らの便宜供与に関する特別決定を下した。

私に関しては、はじめの2つの問題によって有罪とし、求刑する準備が進められました。理由は、私が1984年12月にモンゴル人民革命党中央委員会政治局員に任命される前、幹部職員の便宜供与に関する決定を下していたからです。

私に対する2つの刑事問題は次のようなものでした。

1. Y. ツェデンバルの預金を海外送金する許可を出したことをエルデネバートル検事は犯罪行為とみなしていましたが、私はこれに反証していました。Y. ツェデンバルの40年以上の現役時代に給与を積み立てた預金額は約100万トゥグルグで、すでに家族でモスクワ市で生活していたため、預金を送金し使うことを希望しました。モンゴル銀行に命じ、Y. ツェデンバルの預金額や根拠を調査し、希望通り預金を送金する許可を閣僚会議で決定しました。決定を有罪とするいかなる根拠もありません。もし、モンゴルの司法機関が「ツェデンバルへの個人預金の利用許可が誤りである」との決定を下せば、モンゴルの国家は「人権の不法な侵害をすることになる」と言われていました。エルデネバートル検事は「人の金銭を海外に送金する場合、国家に経済的損失が発生すると言うのはどういう理由か？」と尋ねますが、私はそれに対して送金の仕組みや、送金によって国が損失をこうむらない理由を理解してもらえるように説明を行いました。

2. 特別年金の決定を犯罪とする企図についても反証していました。モンゴル人民共和国閣僚会議決定により1985年～1990年に計5名に特別年金の支給が決定され、その年金は毎月1,400トゥグルグ支給と決定されていました。モンゴル人民共和国年金法で、特別年金を決定する権利が閣僚会議に与えられているのに従い決定したことが有罪とされるいかなる法的根拠もありません。老齢年金の支給額は年金法で直接決定されますが、その上限額からわずか140トゥグルグ多い程度であるのを前例のない高額な年金であるとみなす根拠がないことをやはり説明しました。

登記、評価担当者のほか、証人、数名の警察関係者が映像記録を行う人びとを従えてわが家に入ってきて、すべての家財を登記し、価格を評価し、証書作成、梱包を行い、売却-利用する権利がないことを通告されました。妻ヴェーラの耳飾りや指輪、首飾りを没収し、箱に詰めて封蝋で封印するのを見て、とくにその行為を行っている時「このほかにも貴金属類があるはずだ！」と担当者の女性が言うのを聞き、虫酸が走りました。その女性の考えでは、ヴェーラの使用していたものが気に入らなかったのでしょう。必需品ではない高価なものを徴収するというより、質素に暮らしている人びとについて理解する能力のない人間によって侮辱されていると感じられたものですよ。

それにしても、大勢がわが家に入り込み、好き放題にしていた時、子どもたちが家に

いなかったことは幸いでした。ヴェーラと私にはひたすら耐え、誤った行為をやり過ぎず精神力があることを感じました。検察庁の決定で、私名義の銀行預金2万トゥグルグも使用権が停止となりました。そのほかに預金はなく、仕事もしていなかったので給料といったものはほとんどありません。1990年から始まり、取り巻きと名指しされた人びとを取り調べて弾圧する作業は1992年8月まで続き、首都裁判所の判決が出て終わりにりました。

11 「失われた10年」—— 社会主義の再評価

IL：1990年からモンゴルで起きた出来事について、あなたは現在どのようにお考えですか？わが国のような社会主義国家の一部では、これまでの全期間を「失われた年月だ」と言っているのですよ。わが国ではどんな状況ですか？

DS：1990年中盤に実施されたモンゴル人民共和国人民大会議を刷新する選挙ののち、新たに選出された人民大会議から国家小会議メンバーが任命され、法律制定のための定期的作業が始まったのです。

国家小会議は1992年初頭まで良く機能していました。年配者から若者までさまざまな専門家から構成された小会議のメンバーは、モンゴル国新憲法の起草と平行して民主国家、市場経済の要求に合致した法規の改定作業開始にあたり力を注ぎ、成功裏に活動しました。

国家小会議メンバーは、当時、国益を考えて働くことができたのです。個人、党の狭小な利益に合わせる悪習に染まっていない、純粋な人たちが大半を占めていたことが国家小会議がうまく機能した理由だと言えます。また、当時、いくつかの政党代表が閣僚に含まれていたことが良かったのではないのでしょうか。国家の民主体制成立の黎明期です。

しかし、事態は非常に困難でした。計画経済システムを邪魔者扱いし、組織ごと廃止したものの、市場経済にどのような方法で移行するかが明確でなかったのです。農牧業共同組合（ネグデル）が解散され、家畜は個人所有になっていました。国営農場は解体され、機械化農場主は農業機械を分配し、耕地を分割し所有すべく争いが始まりました。家畜小屋や井戸は管理する人がいなくなり始めました。

工場は経営の調整がなくなったため、事業が衰退し、倒産し始めました。自動車輸送基地では、輸送用機材を運転士が個人的に所有する争いやいさかいが始まっていました。大勢の人が「担ぎ屋商売」を始めていて、これにはルールも調整もありませんでした。「販売準備」や「資材調達システム」は崩壊し始めていました。

「市場がすべてを調整する。モンゴルを疲弊させ、横に倒せば、起き上がり、発展してくる」という思想を、誤った書物から斜め読みで得て喧伝する一部の人たちが国家指

導者としてあらわれてきました。社会主義国と呼ばれた国々とは全面的に関係が断絶し、とくに反ソ連キャンペーンが多くなり、モンゴルとロシアの協力関係をただ悪化させていました。経済、社会生活がこのように無秩序となっていくのを見て憂慮もなくただ静観している場合ではなくなりました。経済システムをどのように改革するかが不明確で、秩序だった政策も作られていませんでした。これらすべてに憂慮し、絶望して私は、注目するはずだと信じ、P.オチルバト大統領やD.ビヤムバスレン首相らに私信を書いていました。

私はモンゴル人民共和国人民大会議の議員だった1992年にモンゴル国新憲法制定に参画していたことを誇りに思っています。モンゴル政府は1996年から2000年までのあいだに4度交代しました。国家の不安定な状況に連動して、社会もまた平穩ではなくなり、口論やいさかい、混乱や騒ぎが多くなり、成すべき仕事を適当にやり、便乗して甘い汁を吸ったり、相手を騙したりするための競争が活発になっているのが観察されました。国民の心情も穏やかではなく、民主化の意義や将来に対し、一部の人は疑問を抱き始めたようでした。

そんな時、「省の幹部に必ずしも専門の人間を置く必要はない、政治家がいればよい」という考えの人事が行われた弊害で、経済、社会発展問題を専門も経験も持たない人たちが指導するようになったことで過ちが発生したことは否定できませんね。民主党メンバーで、微生物学を専門とするバーバル（バトバヤル）が財務大臣に任命された際、財政、経済の特別な専門知識や経験が必要とされるこの重責を遂行できるのか私個人としては疑問でした。私はこのことをバーバル本人に1度会った時に言ったのですが、「やる必要があるでしょう！」という彼の答えを聞いて、いったいどういう意味で言ったのか理解できないまま過ぎてしまいました。

モンゴル国首相にR.アマルジャルガルが任命されてすぐのことですが、彼は責任ある職位に任命されたことを自覚していること、組織の整備を急ピッチで進めていることを前置きして「首相の経済政策顧問にあなたを登用する考えがあるのですが、お受けいただけますか？」と尋ねてきました。私は、このような人事を承諾できない根拠をいくつか示しました。「情報を内外から受け取り処理する、仕事で高い生産性をあげる、市場経済の法則を知りモンゴルの条件下で有効に応用するなどの高い要求がされます。現代の要求に対し、私は英語を解さないことや、多方面の知識や能力が欠けています。決められた時間ではなく昼夜の別なく仕事をする要求は、定年を迎えた私の体力では耐えられません。一方でモンゴル人民革命党党员である私のイデオロギーはあなたがたのそれと合う、合わないといったことが当然出てきます」。こう根拠を述べて断りました。しかし、首相は「あなたの経験、助言がわれわれには必ずや必要なのです！」と懇願するのです。それで「もしそうであるなら、常勤ではなく、必要のある時に私を呼んでくれれば、行って知っていることを話し、助言しますよ。モンゴルの国益のために意見

し、質問や助言をしましょう」と言うのと「それを拒否する人は誰もいません」と言いました。

このような話し合いの最後にR.アマルジャルガルは「それではあなたは私の非常勤顧問になることを承諾してくれますか?」と言うので承諾したのです。私は「あらゆる問題に関して考えを率直に言いますよ。あなたに気に入られるためのお追従は言いませんからね」と言いましたが、首相は「ごもっともです」と言いました。

ところが「あなたが私の非常勤顧問となったことを、マスコミを通じて報道します!」と言うので「単なる宣伝のための登用じゃないだろうか?」という疑念が生まれていたことは確かです。しかし、国益のために「若き首相の正しい行いを支持し、過ちを犯さぬよう注意するために働くべきだ」という思いの方が勝ったのです。

着任後、「あなたは野党出身の首相顧問になってしまったのですか?」と非難がましいことを言う人もいましたが、モンゴル人民革命党の仲間や友人、知人はみな「あなたは正しい決断をしました。まちがった方向に導かないよう助言をするのは当然です。若き指導者を党に関係なく助けるべきです。ただ、あなたの助言を受け入れてくれることを祈っています!」と口々に言ってくれました。

P.アマルジャルガル首相の「非常勤経済政策顧問」だった約1年間、私は政府の定例閣議で討議する問題として準備され、配布された秘密扱いではない決定案を読み、重要と思われる問題に関して、意見を記し、助言していました。注意を払って受け入れてくれましたよ。注目せずに見過ごされた意見があれば、その理由を尋ねると「民主党のバルチザンたちと意見を合わせ、決定を下すのは容易ではありませんよ」とぼやいていました。本当にそのような苦悩があったと思います。私の言うことがすべて承認されるべきでもないのは当然です。

しかし、原案が事前に配布されていない、つまり秘密扱いの問題に関する政府決定案を読み、意見を述べる機会はありませんでした。原則的に重要な財産私有化、予算財政、銀行金融、価格、社会保障、そして対外関係といった問題について作られた資料、決定案を見せてくれませんでした。私がなんとか見ようと粘ったりしていないことは言っておきたいと思います。

とはいえ、私はR.アマルジャルガル首相に対し、多くの注目的となっていた1部の重要な問題に関して、知っている範囲で提案や助言を書き渡そうと努力していました。

モンゴル国の1992年の憲法には「家畜は民族の富であり、国家の保護のもとにある」と定められているにもかかわらず、どうやって理解し、実施するのか不明確なまま十数年が過ぎました。われわれが憲法の施行を不注意に、無責任に行ってきた1つの例です。民族の富である家畜を国民に私有化してしまっておきながら、その富の運命をモンゴルの国家が注意の外に追いやってはいけないことを憲法に反映したことは、モンゴル

の社会と経済の特徴を考慮した行為です。家畜をモンゴルの国家の保護下におくことを憲法に明示した理由として、私はこのように考えます。

— 畜群の構成を効率化し、家畜の品種、血統を良い状態に維持し、モンゴルの家畜の遺伝子保存に国家の注意、支援が不可欠であること。

— 家畜の深刻な感染症を予防・保護する問題を国家が担当、組織するべきであること。

— 天災によって発生する損害を小さくし、放牧地の保護や改良、完全利用に国家の政策調整が必要であること。

— 畜産物の準備、加工、販売は国家が組織しないとなかなか実行されないこと。

これらを基に、経済的に高利益な分野が発展し、モンゴルの人口の大半を占める牧畜従事者の収入を上げ、十分な生活を送る条件を整えることに憲法のコンセプトがあるのではないのでしょうか。このような重要な作業は、国家主導の政策調整のもとでのみうまく実施されるのです。

1990年以降何年ものあいだ、気候条件が比較的良く、大規模な干害やゾド（凍害）にならなかったことから、この問題についてさほど注意を払わずにいたのですが、1999年～2000年に国土の多くを干害やゾドが襲い、幾百万もの家畜が死に、大勢の人の生活に損害を与えたことは、わが国家を深く考えさせ、家畜を憲法に従い保護することに厳しい注意を向けさせたことでしょう。

私の考えを何点かあげましょう。

1. 家畜を国民から買い上げ、加工して食肉として輸出する事業を近年中に組織することが不可欠になります。この事業の意義は次のようなものです。

— 牧民の収入確保と生活の向上。

— 食肉コンビナートおよび食品工場が機能し、雇用が増大できる。

— 輸出による収入が増加し、貿易収支が向上する。

— 主として飼養する基本家畜の質が向上し、困難な時期の基本家畜数が減少することで放牧地の疲弊が予防でき、損害を小さくする重要な条件が整う。

家畜総数が年末に2,600万～2,800万頭にとどまり、年間約7万頭分の食肉を輸出できれば、基本家畜の質は確保され、干害やゾドの時の家畜の死亡数は比較的小さくなります。山羊の数は1990年に400万5,000頭だったのが、1,000万頭にも膨れ上がり、羊やラクダは減少、牛は微増していますが、これは家畜構成の良い変化であるとは見ていません。

2. 家畜、畜産製品を購入する調達システムを早急に整備する必要があります。モンゴル国民が放牧式畜産業を営んでいる主な目的は、家畜を放し、数を数えて見張っていることではなく、家畜の恵みを活用して生活を向上させるためにあります。そこへ国や行政が支援をし、市場経済に加わることで利益や収入を得る条件を整備すべきです。それにはまず準備のシステムを作り、家畜を調達し、食肉を輸出する事業から始めるの

が妥当です。

3. 農牧業共同組合（ネグデル）や国営農場を急ぎ足で解体してしまったものの、それに代わって牧畜業従事者の労働を統合する「協同組合（ホルショー）システム」を整備する作業を可能な範囲で行わずに放置したことがまちがいとなりました。牧畜業従事者たちは「集落（ホトアイル）」を形成し、5～6軒のアイルが「互助組合（ヌフルロル）」になり、互助組合（ヌフルロル）が5～10集まって「協同組合（ホルショー）」を作り、複数の協同組合（ホルショー）が合わさって連合会（ホルボー）を構成する方法で牧畜業従事者が協同組合（ホルショー）を作り始めた一部の県の経験にならい、統一された政策、方法のもと「協同組合（ホルショー）運動」を推進するのが妥当です。

4. 家畜の健康に関し特別な法律を提案し、深刻な家畜感染症の予防接種、疥癬や回虫などの感染予防、消毒、治療を必ず行わせ、これら作業を怠った場合の罰則規定を定める必要があります。モンゴルの家畜を感染症から守る問題は、国家が実施する政策や調整作業によってのみ解決されるのです。

5. モンゴル国内の放牧地を保護し、植生の構成を維持する。とくに劣化した、劣化しかけている草地を特別な保護下に置き回復させる作業を時機を逸することなく組織し、そこに学術研究機関や学者らの支援を得る必要があります。

モンゴル国、モンゴル人は牧畜を営み、自然と近しく暮らす能力や習慣を新世紀にも維持できるかどうか、誇りとする汚れなき自然環境を保護して残せるかどうかという大きな問題が厳しく問われるようになってきました。これらが評価され、答えを出す時期が迫っています。何千年も守ってきた汚れなき自然、本来の姿をとどめている草や草原を現代で絶滅させるという罪を犯すべきではありません。もし草原が失われれば、もし植生の質が低下すれば、モンゴルの牧畜業は基盤を失い、崩壊します。

放牧地保護の問題をいま厳しく提起し、国家、全国民の注意をこの問題に向ける大きな必要が生まれていることを次のことから理解できます。まず全国の放牧地の牧養力に対する家畜数が超過しています。90年代までは年に800～900万頭の子家畜を飼養し、それに近い数の成畜を国内消費や輸出にあて、2,500万～2,600万頭の家畜を越冬させ、春および初夏の草の乏しい草原は3,400万～3,500万頭分の成仔家畜を飼養していました。

国内に家畜が散在し、電動モーター式あるいは手掘りの井戸、深井戸が多数存在していたため、草地の利用状況はより良好でした。しかし、過去十数年で家畜の販売、利用市場が縮小し、それを組織するものがないことが根本的な原因となり、家畜数は3,300万頭まで増え、畜群構成にも大きな変化が現れました。各年の終わりに数えた3,300万頭の家畜を越冬させ、春と初夏のやせた草地で4,200～4,300万頭の家畜を飼養するようになってきました。地下水をくみ上げる井戸が使用不能になって広範囲の放牧地利用が不可能になったことを考えると、利用中の草地の許容量を越えた家畜がいることはまちが

いないのです。

牧畜業を営む多くの人が市場に近づき、生活が向上し、一部の人は家畜泥棒や略奪から逃れるため辺境地から家畜を追って都市部に移動して住み着いています。辺境地域の放牧地が放置され、中央部のトゥブ、セレンゲ、ボルガンといった県の放牧地が劣化し、植生が変化し、地力が衰えていることは危険なことです。トゥブ、セレンゲ両県の牧民によれば、放牧による家畜の栄養状態が急激に悪くなっているそうです。

放牧地を保護、回復する具体的な作業が組織されれば、家畜を国家の保護下に置くことに関する憲法条項を実施する現実的な事業となります。放牧地を守り、復元しようとはいっても、家畜調達システムの整備、牧民の協同組合化、食肉の輸出、基本家畜の改良といった上で述べた意見に注目し実施することが必ず必要となります。

6. 国家の政策、調整、組織作業がモンゴルに市場経済を根付かせる際に不可欠です。

モンゴル国の畜産には放牧による飼養が不可欠です。飼料を与えて飼養する定住式の畜産を一部に設けて拡大することも可能です。しかし、1年ではなく長年にわたり、わが国の放牧式牧畜を営む習慣を伝え残すことは、経済そしてその他の理由によって不可欠なのです。

KY：興味深いお話をお聞かせくださりましてどうもありがとうございました。

DS：どういたしまして。

